

●国際連合大学 2015-2016 年国際教育交流事業●

タイ教職員招へいプログラム

実施報告書

2015年11月9日 - 11月15日

国 際 連 合 大 学 (UNU)
公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

●国際連合大学 2015-2016 年国際教育交流事業●

タイ教職員招へいプログラム

実施報告書

2015 年 11 月 9 日 - 11 月 15 日

国 際 連 合 大 学 (UNU)
公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

はじめに

国際連合大学(United Nations University)は、持続可能な人類の安全保障、気候変動、開発、平和構築など、国連とその加盟国が直面している、喫緊の地球規模の諸問題の解決への取り組みに、研究、教育、能力開発、知識の普及を通じて寄与することを目的とする国連機関です。

国際連合大学は、2002年より主にアジア太平洋地域の教職員や教育分野の専門家等の資質の向上と相互理解の促進を目的とし、日本政府からの拠出金をもとに国際教育交流事業を開始しました。

この国際教育交流事業では、ユネスコ・アジア文化センター(ACCU: Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO)が、国際連合大学の委託のもと、これまでに韓国および中国との交流を行い、2015年12月までに韓国からは延べ1,766名、中国からは1,490名にのぼる教職員を招へいしてきました。また、日本から訪韓した519名、訪中した297名の教職員と併せ、日韓・日中間の相互理解促進、学校間交流に大きく貢献しております。2015年からは、この国際教育交流事業の一環として、さらに多くの国の教職員との交流を図るため、文部科学省、タイ教育省の協力のもと、「タイ教職員招へいプログラム」を実施することとなりました。

今回のプログラムでは、2015年11月9日から15日まで、タイの小・中・高等学校の現職教職員等15名を日本に招へいいたしました。参加者は、教育についての講義、学校や文化施設の訪問、日本教職員との教育交流会議、ホームステイを通して、日本の教育制度やESDの実践および日本の文化・伝統についての理解を深めるとともに、両国間の相互理解と友好促進に貢献しました。

実施にあたりましては、文部科学省、タイ教育省、訪問先の学校、その他教育・文化機関等、多くの方々の多大なるご支援とご協力をいただきました。ここにあらためて、関係の皆様方に厚く御礼申し上げます。

2016年3月

国際連合大学

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

目次

第I章 実施内容	5
-----------------	---

第II章 コメントと提案

1. タイ教職員	15
2. 受入れ学校および機関	24

第III章 日タイ教育交流会議

1. 実施の経緯	29
2. 評価および今後の展望・課題	29
3. 日本参加者の感想	30

付録

1. 実施要項	37
2. プログラム日程	39
3. 参加者リスト	40
4. 関係機関リスト	42
5. 文部科学省講義資料	45

第1章 实施内容

1. 来日、オリエンテーション(第1日)

「タイ教職員招へいプログラム」の参加者15名は、2015年11月9日(月)に来日した。同日、宿泊先である第一イン池袋別館2階フラワーホールにて、オリエンテーションが行われた。

はじめに、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)人物交流部の進藤由美部長が、「日本の学校や先生方との交流を深めていただき、それぞれの目的が達成されますことを心から祈念しております」と参加者に歓迎のあいさつを述べた。続いて随行するACCU職員が紹介され、最後に、担当職員よりプログラム日程の説明や滞在ガイダンス等が行われた。

2. 文部科学省表敬訪問(第2日)

プログラム第2日の11月10日(火)、文部科学省庁舎にて開会式が行われた。はじめにタイ教職員訪問団を歓迎して、文部科学省大臣政務官の堂故茂氏よりタイ語で始まる和やかなあいさつがあり、「ASEAN諸国と日本の中で、人や文化や経済の交流が急増しています。こうしたなかで、対象国として、ASEAN諸国の中でも、タイを選ばせていただきましたのは、重要な二国間関係を、教育分野においてもさらに強化していくべきと考えたからにほかなりません」とタイとの交流の重要性を強調し、「皆さまの滞在中、日本の教育制度や学校での教育実践、ESDの取組について見ていただくとともに、ホームステイなどを通じて、日本の生活や文化にも知見を広めていただきたいと思います」と述べ、訪問団を歓迎

した。あいさつに続いて、堂故氏と訪問団団長のタイ教育省事務次官スプラニー・カムユアン氏の記念品交換が行われた。

次にタイ王国大使館学生部公使参事官のポーンピット・ソムウォン氏によるあいさつがあった。本事業の開催に対して感謝の言葉を述べたあと、本事業ではタイ教職員に日本とタイの教育の違いを現場でしっかりと学んでほしい、と話した。続いて、国際連合大学(UNU)サステナビリティ高等研究所事務総括の横井彩氏によるあいさつがあった。サステナビリティ高等研究所では、近年、都市化による水の問題についてアジア工科大学院(AIT)とチューラーロンコーン大学と研究を進め、来日した先生方に授業をしてもらっている、とタイとの関わりについて説明したうえで歓迎の言葉を述べた。

最後に、カムユアン氏によるあいさつがあり、今回の招へいに対し感謝の言葉を述べ、「本プログラムが両国の教職員のネットワーク強化、そして相互理解と友好の促進につながるだろう」と締めくくった。



大臣政務官の堂故氏(右)と訪問団団長のカムユアン氏(左)

3.(1) 講義Ⅰ（第2日）

「日本における初等中等教育について」
文部科学省 初等中等教育局
初等中等教育企画課
専門官（併）教育公務員係長
山本 剛

開会式に続いて、同会場にて日本における初等中等教育について、文部科学省の講義が行われた。講師は初等中等教育局初等中等教育企画課専門官（併）教育公務員係長の山本剛氏であった。講義内容は以下の通りであった。

日本の基本的な初等中等教育制度

- ① 学校数について
- ② 在籍者数・進学率の経年変化
- ③ 「国＞都道府県＞市町村」という構造
- ④ 教育委員会について
- ⑤ 学習指導要領
- ⑥ 改定事項
- ⑦ 教員養成・免許制度について
- ⑧ 義務教育費国家負担制度について
- ⑨ 教員の給与について
- ⑩ 教科書無償給与制度

質疑応答では、「日本政府の国庫負担金における教育関係の支出の割合はどのくらいか」、「公立と私立ではどのような違いがあるか」などの質問があがった。



山本氏の講義を受ける訪問団

(2) 講義Ⅱ（第2日）

「日本におけるESDの推進について」
文部科学省 国際統括官付
国際統括官補佐 野田 昭彦

続いて、日本のESDについて、同省国際統括官付国際統括官補佐の野田昭彦氏による講義が行われた。講義内容は、以下の通りであった。

I) ESD について

① ESD について

② ESD に関する文部科学省の取組

II) ESD に関するユネスコ世界会議の成果

① グローバル・アクション・プログラム（GAP）の開始

② 「ユネスコ/日本ESD賞」創設の正式発表

III) ESD の更なる推進に向けた取組

① ESD 推進拠点としてのユネスコスクール

② ユネスコスクール支援大学間ネットワーク

③ ESD 推進のためのコンソーシアムの形成

IV) ユネスコスクールにおける ESD 取組例

質疑応答では、「どのようなESD活動をするのかは学校が独自に考えるのか。国が指定するのか」、「発表では小学校の事例が挙げられたが、中学や高校でもESDは推進されているのか」、「各学校でESDを推進するために必要なものはなにか」などの質問があがった。

4. 荒川区立尾久宮前小学校（第2日）

同日午後、一行は荒川区立尾久宮前小学校を訪問した。同校は、1934年に設立され、児童数は258名である。2012年にユネスコ

スクールに登録されており、「人と人・人と自然・人と社会がつながる教育を通して、持続発展する社会を築く人・世界の平和に貢献できる人を育てること」を目標に教育活動を推進している。

一行は、まずランチルームに案内され、児童たちの迎いで、給食交流のため各教室に移動した。メニューは、タイ教職員を歓迎するため、ガパオライス、タイ風汁ビーフン、目玉焼きの形をした寒天のデザート、牛乳が用意された。

給食を終えると、訪問団は校長の伊藤英夫氏に校歴室に案内され、同校の歴史や日本の和太鼓、古いオルガン、おひつ等の展示を見学した。その後、一行は体育館に移動し、全校児童による歓迎演奏を鑑賞した。児童たちは「荒川区の歌」を合唱し、「八木節」を和太鼓やリコーダーなどで演奏した。児童たちが一生懸命演奏する様子に訪問団は感動し、拍手喝采して体育館をあとにした。

ランチルームに戻り、校長および教頭によるあいさつがあった。伊藤氏は、「日本の小学校がどのような教育をしているか見てもらい、国に持って帰ってほしい」と述べた。続いて、教頭の郡司美恵子氏は、「訪問の思い出をお土産として持ち帰ってほしい」と述べた。

続いて、一行は各学年の授業を見学した。全クラスに導入されている電子画面、習熟度別で教えている算数、小学1年生から導入されている英語の授業などが紹介された。

再びランチルームに戻り、用意されていた都電モナカと日本茶を堪能した後、伊藤氏がパワーポイントで同校について紹介した。前述のユネスコスクールとしての目標

を説明したうえで、味噌作りやホダ木によるシイタケ栽培、サケの里親事業など食育を中心に特色ある同校の活動事例を紹介した。

続いて、訪問団と同校の教職員による意見交換会が行われた。訪問団からは、特別支援学級についての質問が多くあった。特別支援が必要な児童を、専門の教員が少人数体制でサポートしている日本に対し、タイでは、特別支援のための先生がいないため、一般教員がサポートを任されているなど両国の相違点が話題にあがった。また、いじめ問題についても両国における違いが顕著にみられ、交流によって新たな視点が得られた有意義な時間となった。

最後に、カムユアン氏があいさつをした。温かいおもてなしに感謝の言葉を述べ、「両国の友好のため、ひとりひとりのつながりを大切にしましょう」と締めくくった。



校歴室にて伊藤氏（左）の説明を受ける一行

5. 関東国際高等学校（第3日）

プログラム第3日の11月11日（水）、一行は関東国際高等学校を訪問した。

到着後、外国語科の舟橋順子氏の司会進行のもと歓迎式典があった。はじめに校長の藤倉秀測氏より歓迎のあいさつがあり、

「国際高等学校はほかにもあるが、タイ語をはじめとする多様な言語があるのは日本の中で本校のみである」と同校を紹介したうえで、「アジアの言語は今後さらに重要になっていくと思われるが、そうした中でタイの教職員の方々をお迎えできるのはうれしく、また、タイの教職員の方々との出会いがあることは本校の生徒にとってもありがたい」と歓迎の言葉が述べられた。続いて、カムユアン氏が答礼として、「本日は授業参観だけでなくタイ語コースとの交流などさまざまなプログラムが準備されており非常に楽しみにしている。本日の訪問が関東国際高等学校とタイの教職員の持続的な交流のきっかけとなることを願う」と述べた。その後、藤倉氏とカムユアン氏が記念品を交換し、続いて、外国語学科長である石島智則氏より学校説明があった。「世界と出会う、世界を考える、世界に伝える」という理念のもとに行われている同校の教育が紹介された。

学校説明が終わると、2つのグループに分かれ、それぞれ韓国語、中国語の授業を参観した。

昼食は、カフェテリアにて学食をいただきながらタイ語コースの生徒との交流の場となった。タイ教職員と同数の生徒が笑顔でテーブルを囲み、日本語とタイ語が飛び交う楽しい時間となった。タイ教職員からは、「タイ語コースの生徒のレベルの高さに驚いた」、「日本にこのように一生懸命タイ語を勉強している生徒がいると知って非常にうれしい」などの感想があがった。

昼食後、ふたたび授業参観が行われた。留学生を交えて行われるロシア語、マンツーマンのベトナム語の授業、レベルの高い

タイ語の授業を見学し、どの授業でも同校の外国語教育の理念、指導方法に感嘆の声があがった。引き続き、インドネシア語、中国語、英語の授業を見学した。

すべての授業見学を終え、カフェテリアに戻った一行は休憩をはさみ、タイ語コース生徒によるタイ舞踊を鑑賞し、生徒によるタイ語でのタイ現地研修についての発表を聞いた。発表が終わると、最後に質疑応答が行われ、副校長の黒澤眞爾氏がタイ教職員の質問に答えた。質疑応答では、「将来、他の言語のコースを増やす計画はあるか」、「生徒の募集、入試はどのように行っているか」、「授業以外の業務にはどのようなものがあるか」といった質問があがった。また、参加者の1人が、「受講者が1人であるにもかかわらずベトナム語の授業を開講しているのに感動した」と感想を述べると、黒澤氏は、「数年前に東南アジアの3つの言語（インドネシア語、タイ語、ベトナム語）を開講し、ある年は1人、ある年は0人ということもあったが、1人でもやる気のある生徒がいる限り授業を開講する」と述べ、会場からは感嘆の声があがった。



タイ語コースの生徒との給食交流会

6. 日タイ教育交流会議（第3日）

同日夕方、同校で日タイ教育交流会議が行われた。参加者は、本プログラムのタイ教職員参加者と、公募によって集まった日本教職員であった。司会進行は、ACCUの進藤部長、ファシリテーターは株式会社メディア総合研究所の福田訓久氏であった。進藤部長はあいさつで、「ACCUは、両国の教職員の友好を深め、互いの国の教育について理解を深めるために交流会議を開催することになった」と本会議開催の経緯を説明した。

続いて福田氏の進行によるワークショップが始まると、円になって着席していた参加者は、それぞれ1分の持ち時間で自己紹介をした。多くの日本教職員はタイへの旅行経験があり、親しみを持っていると話した。タイ教職員も、マナーを守る日本人に大変関心を持っており、日本に対して好感を抱いていると述べた。

続いて、参加者は5つのグループに分かれ、「教育者としてのこだわりは」というテーマでディスカッションを行った。各自は付箋に教育についての思いなどを書き出し、共有した。助け合いや思いやり、マナーや自立、主体性といったキーワードが並んだ。

次に、参加者はおのおのの関心によって、5つのグループに分かれて意見を交わした。まとめ時間に、各グループ以下のようなことを述べた。

◎A グループ（文化、異文化）

異文化の教授法における相違点を発見した。そういった情報が共有できたので、今後役に立てることができるだろう。

◎B グループ（授業における指導法）

たとえば、自身の旅行経験を盛り込むなど、さまざまな教授法や教員としての経験を共有した。

◎C グループ（キャリア教育、進路）

進路教育について話し合ったが、職業体験やゲストスピーカーを招いてのキャリア教育について事例を共有した。特に、高校生は進路に密接にかかわるため、キャリア教育は大切であり、タイでも、日本と同じようなキャリア教育が行われている。

◎D グループ（授業以外での教育）

部活動における、両国の共通点を発見した。文化が近いために、部活動においても共通点があるのではないかと意見が出た。両国共に目標を持って取り組んでいるという点は同じである。

◎E グループ（異文化、食育、環境教育）

給食をはじめとし、食育について話したが、共通点や相違点を確認できた。共通点としては、アレルギー対応、給食での片づけ指導、食べ残し指導などが挙げられる。相違点としては、タイでの休日でも毎日牛乳を各家庭に届ける取組が印象的だった。

ワークショップを終え、カムユアン氏があいさつをし、「今回の交流会議を通して、互いの共通点、相違点を確認し、理解を深めることができた。持続的な交流のため、帰国後も連絡を取り合うことが大事だ」と述べた。また、会場校である関東国際高等学校副校長の黒澤氏が、「ありがたいは漢字で“有難う”と書くが、本日、ここに両国の教職員が集まり、交流会議を持ったことはまさに“有難い”ことであり、参加者をはじめこの会議にかかわった方々にお礼を

述べたい」と締めくくった。



「教育者としてのこだわり」を共有する両国の教職員

7. 千葉県立桜が丘特別支援学校 (第4日)

プログラム第4日の11月12日(木)、一行は千葉県立桜が丘特別支援学校を訪問した。同校は、1960年に病院の施設内特殊学級として発足して以来、肢体不自由教育に取り組んでいる。小学部から高等部の12学年の児童生徒173名が同校で学んでいる。2015年1月にはユネスコスクールに登録され、海外の学校と積極的に交流している。

一行が到着すると、教頭の勝田幸裕氏をはじめとする教職員の出迎えを受け、プレイルームにて歓迎式があった。歓迎式では、はじめに勝田氏が、「国際交流は児童生徒にとって重要な社会参加である。この機会に新しい世界への新しいドアを開けよう」と英語であいさつした。次に訪問団を代表して、カムユアン氏が、「本日のおもてなしに感謝している。今回の訪問で学んだことをタイに持ち帰って今後に生かしたい」とあいさつした。続いて、中学部の生徒が英語で歓迎のあいさつをし、鮮やかな色の法被を纏いねじり鉢巻を巻いて「千葉よさこい島」を披露した。勢いのある掛け声に鳴子

の音が響き、はじめは驚いた様子の訪問団だったが次第に手拍子を始め、笑顔で踊る生徒の頑張りを応援した。踊りの途中では、生徒から訪問団一人ひとりに鳴子がプレゼントされた。その後児童生徒代表とカムユアン氏が記念品を交換した。

休憩をはさみ、勝田氏による学校概要説明があった。説明では、千葉県内での同校の役割や歴史、教育目標、教育課程、国際理解教育、給食について説明があった。次に訪問団を2グループに分け、同校の教職員との意見交換が行われた。そこでは、予算の仕組み、卒業後の進路、教員の採用、児童生徒の評価方法、寄宿舎の管理体制についてなど、活発に質問があがった。

続いて、授業参観および施設見学があった。中学部の国語や社会、高等部の総合的な学習のほか、手織りや陶工などの作業学習、からだの学習など同校の特徴的な授業を見学した。音楽室では、太鼓のバチを持たない児童生徒が太鼓を使えるように、ゴムとテニスボールを使って作られた楽器を見たり、寄宿舎では、車椅子の児童生徒が使いやすいように傾斜を付けた棚や浴室などを見学したりした。

次に、同校の教職員が千葉で一番おいしいと胸を張る、給食を体験した。メニューは、おでん・茶わん蒸し・鯖煮・ピーナツ和え・ごはん・味噌汁・伏姫みかん・牛乳だった。はじめに勝田氏から、訪問団には是非和食、特に出汁を味わって欲しいと思い、このメニューにしたこと、米・菜の花・みかん・ピーナツ・牛乳は千葉で採れた食材であること、また、優秀な栄養教諭がいるからこそ質の高い給食を提供できるとの説明があった。訪問団は、魚の骨が取り除い

であることなどに驚きながら、おいしい給食に舌鼓を鳴らした。

自身の食事を終えると、児童生徒の給食の様子を見学し、充実した施設や教職員数を目の当たりにした。栄養教諭の長谷部絹江氏からは、児童生徒の食べる力によって、普通食・つぶ食・ペースト食の3種類を準備していることや、例えばおでんなど複数の食材を使うメニューは、大根は大根だけ、いんげんはいんげんだけでペーストにし、それを一つの皿に盛りつけることなどが説明され、訪問団は驚いた様子だった。

最後に、記念写真を撮り、一行は同校を後にした。



活発に意見を交わす両国の教職員

8. 渋谷区立原宿外苑中学校（第5日）

プログラム第5日の11月13日（金）午前、一行は渋谷区立原宿外苑中学校を訪問した。同校は勉強だけでなくスポーツや部活動も盛んである。また、英語・数学・理科の少人数習熟度別クラス編成授業や渋谷区の学力向上を目指した研究指定校を受け、授業時数を確保するために7時間授業の日や土曜授業を行うなど、多くのことに積極的に取り組んでいる。

学校到着後、校長の白倉昌裕氏より流暢

なタイ語を交えたあいさつと学校紹介があり、同校の教育目標（自主、共生、健康）や、学校の掲げる生徒像を実現するための取組などの説明を受けた。「学ぶ」の実践例として、少人数授業や夏季補充教室、「表現する」では地域調べ学習や職業体験、「団結する」では体育祭やなみき祭、「鍛える」では部活動とボランティアなどが紹介された。その後、体育祭や部活動のビデオを鑑賞し、同校の取組への理解を深めた。学校説明終了後、渋谷区教育委員会教育長の森富子氏、同委員会教育振興部長の児玉史郎氏よりあいさつがあった。森氏は、生徒の学習レベルが高く、部活動も活発であることを同校の特徴として紹介し、生徒・教職員と楽しい時間を過ごしてほしい、と述べた。児玉氏は、コミュニケーション能力・個性をどのように伸ばすかが大事であるとし、グループワークやケースワークをどのように実践しているかこの学校で観察してほしい、と述べた。続いて訪問団団長であるカムユアン氏が答礼として、このように素晴らしい学校を訪問できたことを光栄に思う、と述べた。

続いて授業参観が行われた。数学、英語、国語、技術、体育、理科、英語の授業を参観したほか、保健室や職員室なども見学した。特に2クラスを参観した理科の授業では同じ内容を異なるアプローチで扱っており、習熟度別学習の好事例として、一行は熱心に指導法を観察した。

授業参観終了後は、各クラスにタイ教職員が2~3名ずつ入り、給食交流が行われた。事前学習でタイ語のあいさつを学んだというクラスもあり、あたたかいおもてなしを受け、楽しいひとときとなった。食事を終

えると、意見交換会が行われ、白倉氏、森氏、児玉氏に加え渋谷区教育委員会教育振興部指導室長の田中康雄氏が出席した。「教職員をどのように評価するか」、「教師の昇進システム」、「給与以外の手当てはあるか」、「学校運営者は授業を持つことがあるか」、「良い教授法、良い先生のデータを記録しているか。また、そういったものをどのように他の教職員に引き継ぐか」、「教師の1週間当たりの勤務時間はどれくらいか」などたくさんの質問があがった。意見交換会終了後、森氏とカムユアン氏が記念品を交換し、記念写真を撮影した後、一行は同校をあとにした。



技術の授業を見学するタイ教職員

9. 明治神宮（第5日）

同日午後、一行は明治神宮を視察した。奉納された酒樽やワイン樽を見物したのち、ACCU職員より、木造の明神鳥居としては日本一の大きさを誇る大鳥居についての説明を受けた。三の鳥居から社殿域に入り、拝殿や夫婦桶などを見て回った。和装の人が多かったため、日本の伝統衣装についての質問や、千歳飴、七五三についての質問があがるなど、タイ教職員は日本文化について高い関心を示し、真剣に学んでいた。



酒樽の前で記念撮影する一行

10. ホームステイ（第5～6日）

明治神宮視察後、関東国際高等学校に移動し、16時よりホストファミリーとの対面式が行われた。翌14日15時まで、それぞれのホストファミリーと過ごし、短い時間ながら、日本人や日本文化に直接触れることができるあたたかい時間を過ごした。

第II章

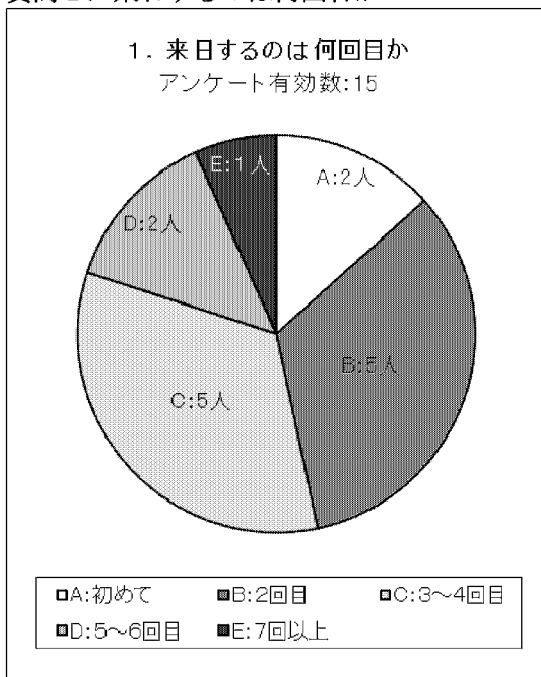
コメントと提案

1. タイ教職員
2. 受入れ学校

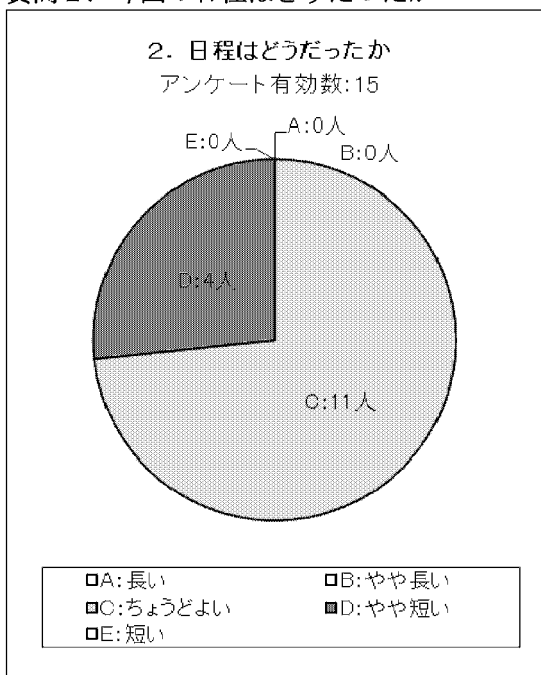
1. タイ教職員

*原文はタイ語（一部、英語）。ACCUにて仮訳。

質問 1. 来日するのは何回目か



質問 2. 今回の日程はどうだったか



【ちょうどよい】

- 一週間はちょうど良かった。
- これ以上長くなると、教育交流というよ

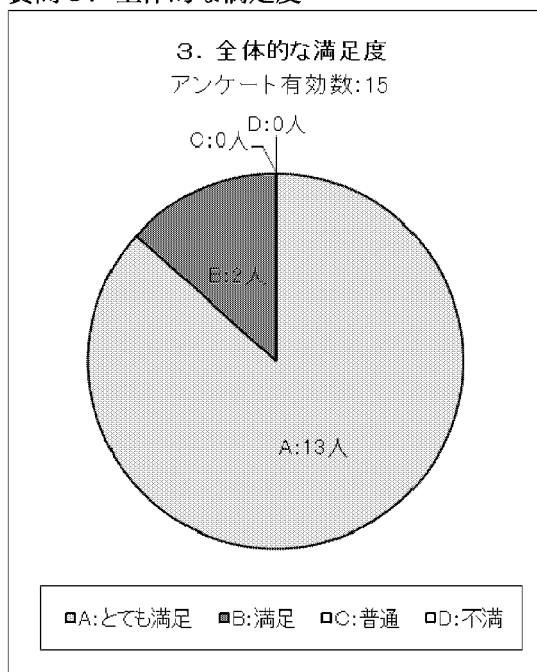
り旅行になってしまうと思う。

- もっと日本に滞在したいが、仕事のことを考えるとちょうど良い日程だと思う。
- ホームステイの時間を延ばせば、もっと日本の文化を学べると思う。

【やや短い】

- 一日1つの学校が望ましい。意見交換できなかった先生もいるので、教職員同士の意見交換の時間を伸ばしてほしい。
- 講義がすこし短く感じた。質疑応答の時間が足りなかった。
- 日本の文化も学びたいので、2週間くらいが適切だ。

質問 3. 全体的な満足度



【とても満足】

- 良いプログラムだ。さまざまな学校を訪問でき、情報や知識を得ることができた。
- 学校訪問はとても役に立った。通常の旅行では行けない場所を見学できるし、いくつかの学校では校長から学校概要説明を受けることができたのが非常に良かった。
- 全体的に満足。とても有益だった。
- さまざまな学校を訪問したことで、タイの学校でも生かせるものを得ることができた。
- さまざまな学校の訪問、日本の教職員との意見交換で得たものを自分の授業にも役立てることができると思う。

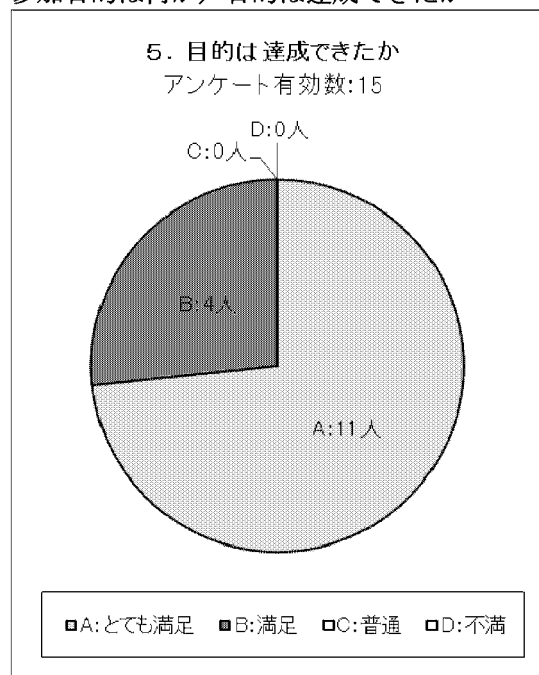
- 日本の教育制度や ESD について理解を深めることができた。
- 今回学んだことを自分なりに整理して、授業に活用することができると思う。
- 日本の小学校、中学校、高等学校、特別支援学校を訪問することができて非常に良かった。さまざまなことをタイの学校で生かしたい。
- 学校訪問を通して日本の教育制度について理解でき、情報交換などにより両国の相違点がわかった。
- タイの教職員が日本の教育制度について学び、日本の教職員と意見交換をできる良い機会であり、今後の両国の友好促進に繋がると思う。ただ行って帰ったというだけではなく、ESD のヒントが得られた。
- 互いにさまざまな視点を得られた。
- タイ教職員が日本から学び、日本の先生方と経験を共有することのできるとても良いプログラムだと思う。タイ教職員の得たものはとても大きいと思う。

【満足】

- さまざまな学校を訪問したことで、日本の教職員と繋がる機会になった。また、日本の文化を体験できた。
- ホームステイの時間がもっと長ければ完璧だと思う。

質問 4 および 5.

参加目的は何か／目的は達成できたか



【とても満足】

- 参加目的：今回のプログラムで得たものをタイでの教育に生かしたい。
達成度：目的を達成し、とても満足している。特に日本の教育や学校について、今まで知らなかったさまざまな情報を得られた。
- 参加目的：日本の教育について学び、自身の授業に生かしたい。
達成度：以前別の交流プログラムに参加したことがあり、同じようなものをイメージしていたが違っていた。さまざまな新しい知識を得られ、今後の授業に活用できると思う。
- 参加目的：授業の進め方について意見交換をすることと、日本の生活を体験すること。
達成度：すべて達成した。
- 参加目的：日本の学校教育について知ること、タイの教育の質を向上させること。
達成度：学校訪問を通じて自分の欠点がわかり、改善するためのきっかけを得られた。
- 参加目的：得たものを自身が活用するとともに、学校の同僚に報告し、学校全体がその経験を生かせるようにする。
達成度：達成でき、とても満足している。

タイとの相違点を発見した。例えば、校内用のスリッパやロッカーがあること、外国語の教授法などである。

- 参加目的：日本の教育制度やカリキュラムについて理解すること。
- 参加目的：両国の教育の長所と短所を共有し、自身の授業に取り入れることができる活動を見学すること。
達成度：児童生徒が新しいアイデアを生み出すことができる活動や授業を見学できた。
- 参加目的：日本の教育現場を見学すること。そして、日本教職員とのネットワークを構築すること。
達成度：日本の教育への理解を深めることができた。日本の教職員と交流し、また、フェイスブックのアカウントやメールアドレスを交換することでネットワークを構築できた。
- 参加目的：日本の教育制度について学ぶこと。日本教職員と教育について意見交換をし、経験を共有したい。
達成度：学校訪問では日本教職員と意見交換ができた。日本の教育制度を理解したことで、自分の学校にも生かせると思う。
- 参加目的：学校訪問や授業見学から得たものを生かし、日本の教職員とのネットワークを構築すること。
達成度：しっかりした授業作り、授業計画をみることができた。また、日本教職員とのネットワークを構築することができた。
- 参加目的：日本の教育の長所をタイの学校で活用すること。
達成度：学校に生かせる有益なメソッドを学べた。
- 参加目的：さまざまな学校を訪問し、それぞれの授業方法や、タイでも活用できるESDの実践例を見ること。
達成度：訪問校の教職員から各学校の教育方針や教育課程について学んだ。また、日本教職員と意見交換時に質問をすることで、自国での教育に活用できるものを得られた。

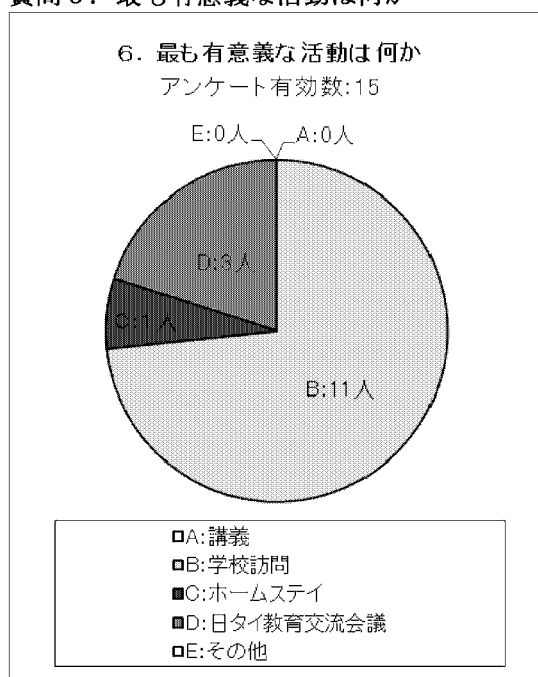
【満足】

- 参加目的：日本の教育への理解を深めること。日本教職員と教育について意見交換をすること。日本の文化、言語などを学ぶこと。

達成度：ワークショップの時間がもっと長ければ、日本の教育への理解をさらに深めることができたと思う。

- 参加目的：日本文化について情報を得ること。
達成度：文化や教育における両国の相違点が理解できた。
- 参加目的：両国の教職員間のネットワークを構築すること。
達成度：両国の教職員はまだ知り合っただけなので、一緒にできることをこれから考えていく必要がある。

質問6. 最も有意義な活動は何か



【学校訪問】

- 学校の雰囲気や進め方を見ることができ、教職員や生徒と意見交換ができた。
- 授業の雰囲気や進め方、生徒がまじめに勉強する姿を見られたこと、また、廊下の掲示物なども興味深かった。自分の授業で取り上げたいと思う。
- 日本の学校の教育方針について知ることができた。タイの教育にも活かせると思う。
- 実際に日本の学校が見ることができた。
- 日本の学校は同じ教育制度の中でも、各学校ごとに異なる特徴があることを知ることができた。
- さまざまな学校を訪問でき、日本教職員に直接質問できた。

- 各学校の教育課程や教育方針について知ることができた。タイとの類似点もあれば、相違点もあった。実際に見て学んだことで、自身の学校にも取り入れることができると思う。例えば、「良いことは家から始まる。命令ではなく一緒にやる」という考えは共感できた。そうすることで、子どもは持続的に成長できると思う。
- 両国の教職員が交流できた。

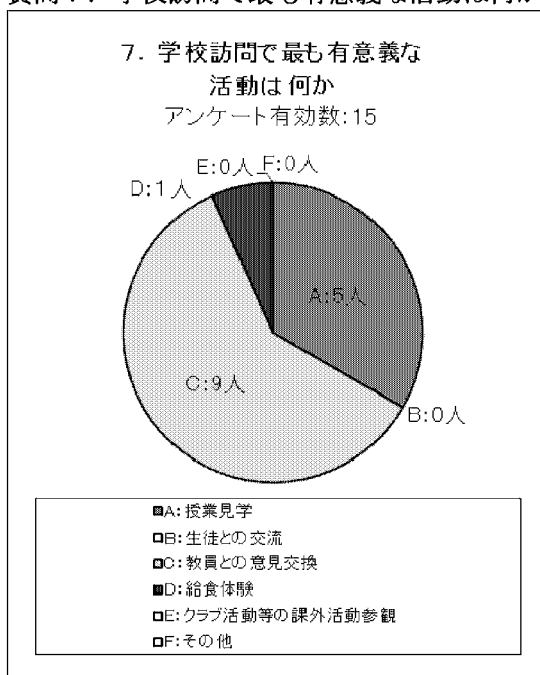
【ホームステイ】

- ホームステイで日本の文化への理解が深まった。学校生活、日本の家庭について話を聞くことができた。

【日タイ教育交流会議】

- 日本教職員と意見交換でき、日本の教育制度について理解できた。
- 交流会議を通じて、日本の教育課程について知ることができた。
- 教授法について情報交換ができ、両国の教育の長所、短所が分かった。

質問7. 学校訪問で最も有意義な活動は何か



【授業見学】

- 授業の雰囲気、生徒の理解度、教職員の厳しさ等を見ることができた。日本教員の生徒への心配りを見て、とても感動した。
- 授業中の児童生徒のようすがわかった。
- 授業の雰囲気を知ることができた。
- さまざまな授業を直接見ることができた。

- 授業見学を通して、日本の授業は進んでおり、最先端の技術を取り入れていることがわかった。また、愛国心や、細部に至るまでの気遣いを教えていることがわかった。

【教員との意見交換】

- 日本の教育についてさまざまな情報を得ることができた。
- 校長や教頭、教職員の方との質疑応答では、細かいところまで説明していただき、よく理解できた。自分とは異なる考え方を知り、とても良い経験になった。
- 教職員との意見交換を通じて、ESD 実践のヒントを得ることができた。
- 学校教育の仕組みや教育制度の細部まで理解できた。
- 授業や教育活動の好事例を知ることができた。
- 教育的な面で視野が広がった。両国の特徴や問題を取り上げて分析し、それぞれ活用できると思う。
- 教育という同じ分野で働いている人と意見を交わすことで、教育の視野が広がる。
- 日本の学校での授業の進め方が理解でき、質問や意見交換もできた。また今後の友好関係にも繋がると思う。
- 両国の教職員がそれぞれの視点や意見を共有できるので、教職員同士の意見交換は非常に重要だと思う。

【給食体験】

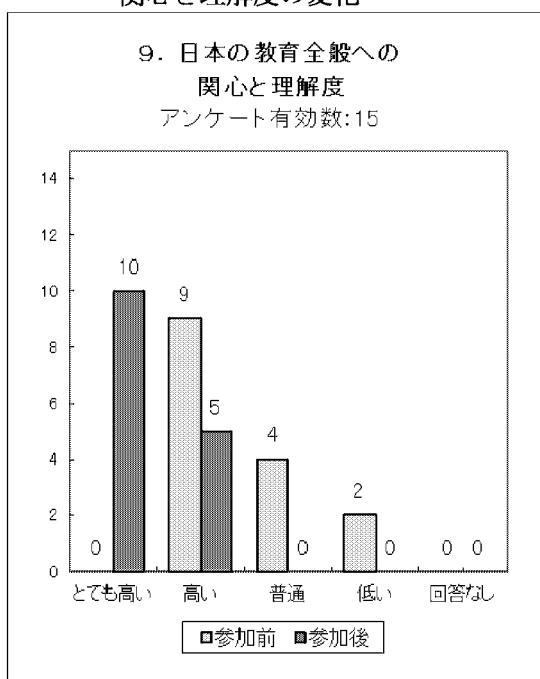
- 学校と教職員がどのように生徒の給食に気を配っているか、生徒に食事についてどのように教えているのかがわかった。

質問8. 他にどのようなプログラムがあったらよいか

- 日本の文化体験や日本の代表的な観光地巡り。
- 日本料理などの文化体験。
- 博物館と代表的な観光地巡り。
- 興味のある学校を自由に選択し、訪問できるような日程。
- 幼稚園の訪問。日本の子どもが最初にどのように教育受けるのか、どのような仕組みなのかがわかるプログラム。
- 授業の最初から最後まで通しでの見学。
- 幼稚園も見に行きたい。
- 日本文化の体験や、授業への参加。例えば、タイ語を教える等。

- 日本の文化や言語を学ぶためにホームステイの時間を延ばす等。
- 文化的な場所の見学。
- タイに興味を持ってもらうため、また今後タイと日本の生徒の交流に繋げるために、タイの教職員と日本の生徒の意見交換の機会があると良いと思う。
- 伝統衣装を着る、茶道、作法に触れる等の機会。また、博物館等の見学。
- 相互理解促進のため、史跡や文化的な場所の視察があればと思う。

質問 9. 日本の教育全般への 関心と理解度の変化



【高い→とても高い】

- 参加前はあまり関心がなかったが、参加後は関心が高まった。特に関東国際高等学校が素晴らしかった。
- もともと関心があったが、さらに高まり、また、日本の教育への理解が深まった。
- 日本の教育についてあまり知らなかったが、参加後に理解が深まった。生徒の学習方法やどのように学力向上を図るかなど、日本の教育制度への関心が高まった。
- 参加前から日本の教育には興味があった。参加して驚いたのは、先生が生徒に特別教えていなくても、生徒がしっかり礼儀作法を理解し身につけていたことだ。学校だけではなく、家庭から教え始めるということがわかった。

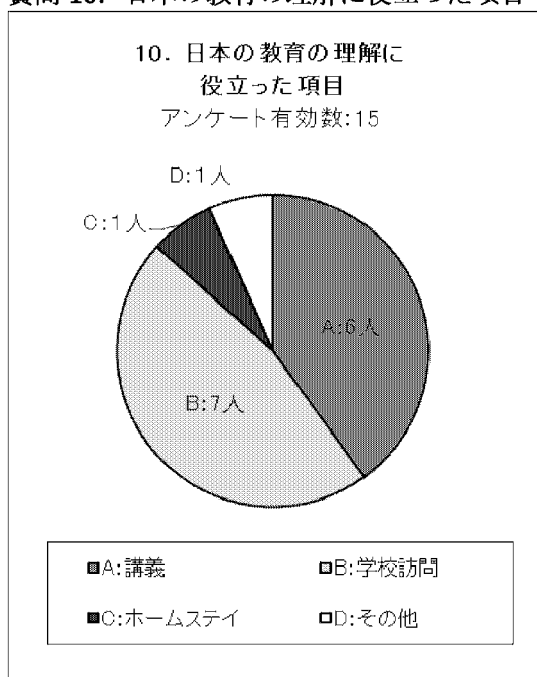
【普通→とても高い】

- 参加前は普通だったが、参加後は興味が高まった。

【低い→高い】

- 日本の基本的な教育制度や、教職員の採用方法、生徒の募集方法などがわかった。例えば、都道府県や市区町村管轄の学校があることや、日本の義務教育がタイと同じで中学3年生までであることなどだ。

質問 10. 日本の教育の理解に役立った項目



【講義】

- 日本の教育についてよく理解でき、また、分からないところがあれば質問できた。
- 日本の教育制度について知ることができた。
- 日本の教育制度や仕組みがわかった。
- 質疑応答で、講義者の意見や課題への対策などを聞くことができた。

【学校訪問】

- さまざまな学校を訪問することができた。小・中・高等学校を訪問し、それぞれ非常に興味深く、タイの学校との相違点がわかった。
- 日本の初等中等教育への理解が深まった。
- 学校の雰囲気や授業の進め方を見ることができた。また、質問や意見交換もできた。
- 学校のシステムを具体的に理解できた。
- 日本の学校を実際に見ることができた。

- 実際に各学校の教育現場を見ることができた。また、両国の教育について意見交換ができた。
- 実際に現場を見ることができた。

【ホームステイ】

- 保護者の立場からの意見を聞くことができた。例えば、日本の教育制度は素晴らしいが、児童生徒次第という一面もあるという。自らまじめに勉強に取り組むことができる子どもはいいが、そうでなければ親にはどうすることもできない場合もあるという話を聞いた。こういった保護者の考えは、講義では聞くことができない。

【その他】

- どういった「教育」の理解かによるが、教育行政の構造や教育制度全体についての理解であれば、文部科学省での講義だろう。しかし、教授法や学習課程であれば学校訪問である。

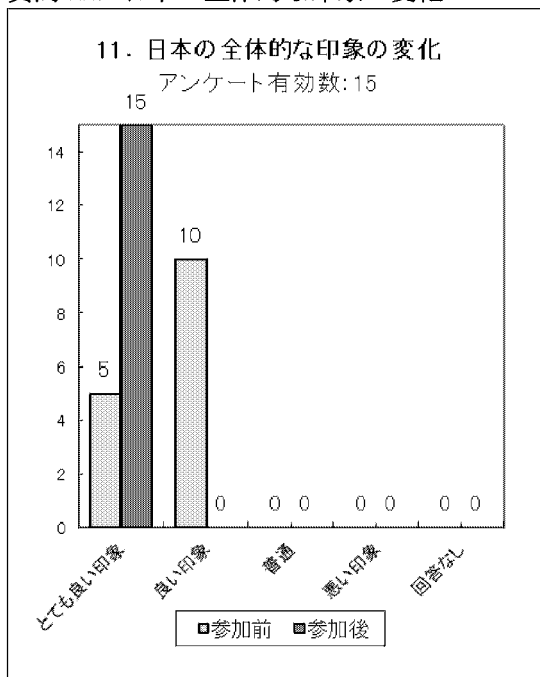
びに良い印象を受ける。日本文化も非常に面白く、日本人はどんなことでも細部までこだわっていることがわかった。

- 前から良い印象を持っていた。
- もともと日本に興味があった。また、これまで日本文化を学んできたので、今でも非常に良い印象を持っている。

【良い印象→とても良い印象】

- 参加前から日本人に良い印象を持っていた。参加してみると、さらに印象が良くなった。学校での歓迎が素晴らしく、非常に感動した。
- 日本人や日本の文化への印象が前より良くなった。
- 以前から日本に良い印象を持っていた。参加後、日本の教育にも非常に好印象を持つようになった。
- もともと日本に良い印象を持っていたが、参加後、さらに尊敬し、好きになった（特に日本教職員）。
- 日本人と日本の文化には全体的に良い印象を持っている。
- 以前一年間留学したことがあるが、日本人の優しさや気遣いをあらためて感じた。
- 日本人と接し日本文化を体験したことで、日本の国民の礼儀作法や文化、規律正しい生活を実感できた。
- 日本人は愛国心を持っており、気配りができ謙虚で、礼儀正しく他人を尊重する、という印象がある。
- 「良い印象」から「とても良い印象」に変わった。実際にこの目で日本の生活様式を見ることができた。日本人や日本の社会に尊敬の念を覚えた。

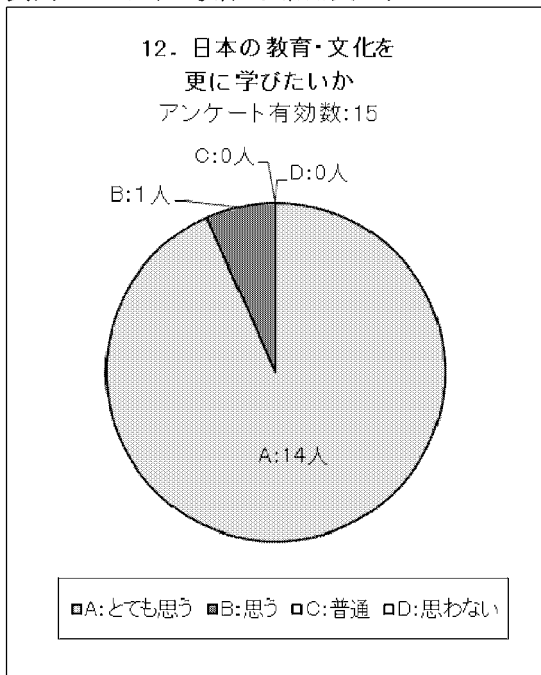
質問 11. 日本の全体的な印象の変化



【とても良い印象→とても良い印象】

- 最近、日本が少し変わったと感じた。若者が明るくなった。例えば、以前は一緒に写真撮影をすることに抵抗感を持つ子がいたように思うが、どの子も笑顔で一緒に写真に写ってくれるようになった。このような変化は非常にうれしい。
- 日本人は礼儀正しく、社交的で、会った

質問 12. 日本の教育・文化を更に学びたいか



【とても思う】

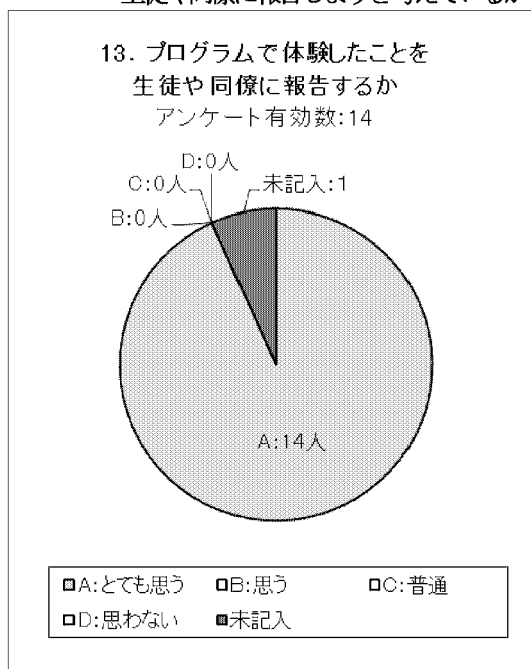
- 日本の教育と文化にとっても興味があり、学ばば学ぶほど役立つものを得ることができるから。
- 高等学校のカリキュラムを学びたい。生徒の国語の教科書も見たい。
- タイの生徒に伝えるために、もっと日本の教育や文化を学びたい。
- タイの教育の質を向上させるため、日本の文化などを学びたい。
- 教授法や日本の文化についてもっと学びたい。日本語を担当しているので、日本語の授業にとっても役に立つと思う。
- 伝統文化について学びたい。
- 自身の教育活動に生かすためもっと学びたい。
- もっと日本の教育と文化について理解を深めたい。
- 両国の友好関係促進のために、日本について学びたい。
- 日本には人材育成のためのさまざまな興味深いアイデアがあるので、タイでも活用したい。
- 機会があれば、人材育成のために、日本の教育カリキュラムを学び、タイの学校でも活用したいと思う。
- 日本に来る機会があれば、日本人とコミュニケーションできるよう、日本語を学びたいと思う。

- 教育や文化面での両国の交流を実践したい
- 日本についてもっと知りたい。特に茶道や歌舞伎など昔の文化や伝統など。

【思う】

- 日本のカトリックの学校についても理解したい。

質問 13. プログラムで体験したことを生徒や同僚に報告しようと考えているか



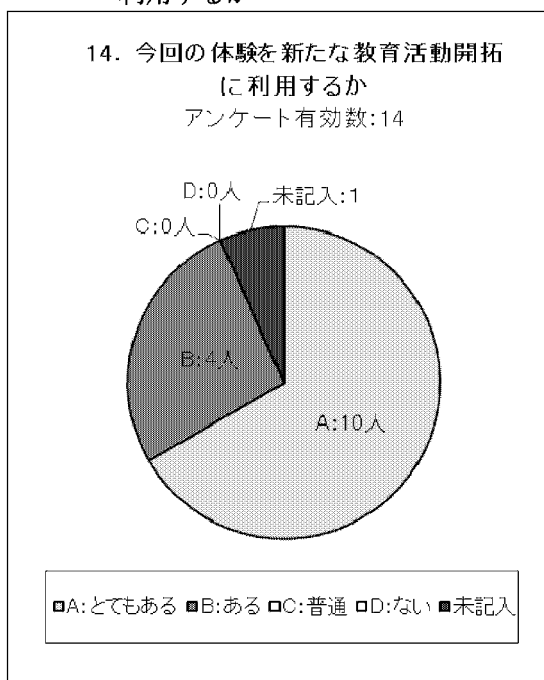
【とても思う】

- もちろん報告する。特に教育面で役立つと思う。
- 教育について得た知識などを是非報告したい。
- 日本はアジアの中で最も発展しており、また、日本の教育システムが非常に良いと感じたので報告したい。
- プログラムで得た知識、経験などを報告すれば教職員や生徒はとても喜ぶと思う。
- もちろん報告する。同僚の教職員や生徒にとって有益だと思う。
- 生徒、同僚が日本のことをさらに理解できるように、プログラムについて報告したい。
- 定例会議で日本の教育について同僚に報告したい。
- 日本の教育について教職員と生徒に報告する予定。
- 自分は日本語を教えているが、文化を教

えることも大事である。このプログラムでの経験を、生徒や同僚、また、校長などに報告する予定。

- 今回参加したことでたくさんの知識を得ることができ、また良い経験ができたので、ぜひ報告したい。
- 生徒に報告し、生徒自身が良いところを見習えるようにしたい。
- このプログラムでの経験は非常に価値がある。日本の教育や人びとの良い点を生徒や同僚に報告する。
- まず、プログラムでの経験、見たものを細部に至るまで学校の会議で報告する（教員 140 名）。また、同僚、生徒、家族にも日本のマナーなど細かいところまで報告したい。
- まず生徒に、そして会議で同僚に報告する予定。
- 必ずこのプログラムについて報告し、情報を共有する。また教育省に向けたレポートも作成する。

質問 14. 今回の体験を新たな教育活動開拓に利用するか



【とてもある】

- 今回の体験は非常に有益だったので、帰国後、自身の教育活動開拓に利用しようと思う。
- ESD を学校の活動に取り入れたい。
- まず自分自身の知識として吸収し、それ

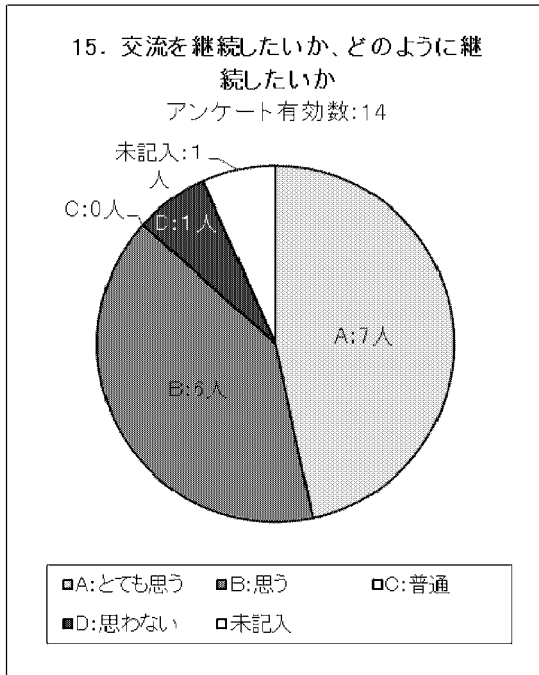
から特に日本語を教える際に利用したい。

- 両国の生徒間で、SNS による意見交換を行うことを計画している。
- 同僚の日本語教員にも日本の教職員やホストファミリーの方と触れ合った経験を共有することで、日本についての理解を深めてほしいと思う。
- 今回の経験を自分の授業に生かしたい。
- ユネスコスクールに加盟するために、ESD を教科課程として位置づけることに興味がある。
- ESD を活用したい。全科目の教員の協力を得ながら、今回得た知識や教育理念を授業に生かしたい。
- 日本の学校の登校から下校までのルールなどを取り入れたい。また、可能であれば学校間の交流プログラムを実施したいと思う。

【ある】

- 生徒がより積極的に授業を受けるような教え方を模索する際に今回の体験を役立てる。
- ESD がタイでも実践できればと思う。
- ESD を授業に取り入れたい。
- 学校の管理職や同僚に次のことを提案したい①ESD について知る②学校訪問を通して ESD 活動を見学すること③タイと日本の交換留学

**質問 15. 交流を継続したいか、
どのように継続したいか**



【とても思う】

- SNS 等を用いて交流を継続したい。
- 以前、関西の私立校と交流したことがあるが、今後は制服がある学校や公立の学校と交流したい。
- 両国の生徒の交換留学などを考えている。
- 両国の教職員間の交流や、生徒の交換留学などを考えている。
- 交流を通して両国の相互理解が進むと思う。例えば、両国の生徒が交換留学やホームステイなどができれば良い。
- 両国の生徒交流が持てればと思う。
- 日本の教職員とパフォーマンスや文化などをテーマに交流することに興味がある。

【思う】

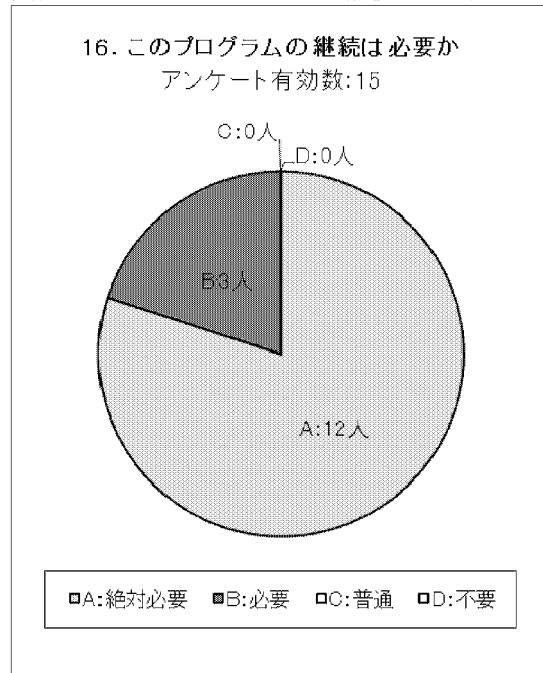
- 交換留学を考えている。
- 教育の質を向上させるような交流をしたい。
- 機会があれば、日本の教員と一緒に授業をしたり、ESD を取り入れた活動をしたいが、それには自身の知識や日本語能力がまだ足りないと思う。
- 今回訪問した学校ではなく、もし ES D を実践しているカトリックの学校があれば交流したいと思う。
- 福岡県と MOU を締結しているが、生徒の交換留学を行っているのみで、今回のプログラムのような教職員による学校プロ

グラムはこれまでなかった。できれば、福岡県とも短期間での教職員交流をしたいと思う。実際に授業を行うことで、生徒は互いの国に興味を持つようになると思う。

【思わない】

- すでに福岡県の学校と交流しているので、そちらを継続したい。

質問 16. このプログラムの継続は必要か



【絶対必要】

- 日本の教職員と交流するうえで非常に有効なプログラムだから。
- 新しい教育に繋がり、今後、教育の質が向上すると思う。
- 日本を参考にすることで、タイの教職員の質が向上するから。
- 絶対必要だが、学校訪問や教職員の意見交換の時間を延ばしてほしい。
- タイの教職員が日本の教育について理解する機会となり、また自身の授業にも活用できるから。
- 自分自身今回の経験は非常にためになった。旅行などでは訪れることのない学校に行けたことが非常に良かった。
- 教育に関して知識・経験の共有ができ、両国の関係を深めることのできるプログラムだと思うので絶対必要だと思う。
- 今回の参加で海外の教育についての視野が広がった。今回得られたものを生徒や

- 同僚の教職員に広げたいと思う。
- 視野が広がり、互いの教育の良いところを学べるから。
 - 講義だけでなく、実際に教育現場を見ることで、日本の教育について理解できるので、継続は絶対必要だと思う。ただし、今回のプログラムの日程では時間が足りない。
 - 教職員の視野が広がり、自身の学校においてもそれが活かされると思う。
 - 両国の教職員が考えを共有し、教育分野における協力を強化することができるので、このプログラムは今後も絶対必要だと思う。

【必要】

- タイの教職員が経験や知識を得ることで新たに開拓できるから。
- 学校の管理職などにも参加してほしい。
- 持続性のある教職員間のネットワークを作ることができるプログラムだと思うので、必要だと思う。

2. 受入れ学校

●荒川区立尾久宮前小学校

校長 伊藤 英夫

プログラムの全体的印象

- 来校された先生方に子どもたちを「かわいい」と思って接していただけたので、子どもたちも親近感を増幅させた。
- 給食（ガパオライス）を共にしたことで子どもたちも先生方も楽しく過ごせた。
- 全校合奏で日本の伝統音楽「八木節」を披露したことが、タイの先生方に好評であった。

プログラム成果

- 2年前に「中国教職員招へいプログラム」で中国の先生方を迎え、子どもたちは中国への理解を深めた。同じく今回はタイの先生方に接することでタイを身近に感じることができた。
- 事前に地理的・歴史的背景を学習させたことと、簡単な挨拶等を練習させたことで、タイへの理解を深めた。
- 事前にお便りで地域にお知らせし、翌週の学校行事でも全保護者・地域に簡単な挨拶や学習した内容をお知らせした。

苦勞した点

- 本校は以前、中国の先生方を迎え入れた経験があるため、大きな苦勞はなかった。むしろ楽しみが大きかった。
- 困ったこととしてあえて挙げるなら到着が遅れ、給食時間が遅れたことくらいである。

加えるとよいと思われる活動

- 来校される先生方から「自国の自慢や学校情報等」を子どもたちに伝える機会がほしい。

プログラムの改善に向けた助言

- 来校する先生方の情報が早く分かれば、迎える側としてお迎えの内容を更に充実できる。

● 関東国際高等学校
教員 舟橋 順子

プログラムの全体的印象

- ▶ タイ教職員の方々は本校にて、学校説明、授業見学、本校の生徒の家庭へのホームステイ、タイ語コースの生徒との交流を行った。本校の教育方針に大変興味を持たれたようだった。
- ▶ ホームステイでは、日本の家庭で有意義な時間を過ごされたようだ。双方にとって、とても素晴らしい時間となった。

プログラム成果

- ▶ 日タイ教育交流会議でのグループトークでは、文化・異文化・指導方法・キャリア教育・授業外での活動・食育などのテーマで両国の教職員が議論をした。最後に代表者がまとめて発表した。特にタイのミルクプロジェクトは非常に興味深く、もっと詳しく聞きたいと思った。両国の教育の Exchange という観点では、その入り口を示唆してくれるような話題や内容が提供されたと思う。
- ▶ タイの教職員の方々は意識や見識が大変高く、意欲的に発言されたので、そのイニシアティブに引っ張っていただき、活発な議論ができた。

苦労した点

- ▶ メール連絡は頻繁にできたのだが、事前打ち合わせや、現場を見学しながら当日の動きを確認するなどの時間はあまり持てなかった。当日の運営の方法や授業内容の説明などの点において、十分に共有することができなかったなどの課題があった。

加えるとよいと思われる活動

- ▶ 両国の教職員が話し合いやミーティングだけでなく、一緒に外へ出て何かの活動をすると思う。具体的には、例えば何か日本文化を見学しに行き、それについて話し合うなどである。

プログラムの改善に向けた助言

- ▶ 今後も引き続き両国の交流プログラムを続けていただきたいと思う。規模を大きくし、会議参加者の対象も広げて良いのではないと思う。
- ▶ 両国の教職員間の交流が学校間の交流につながり、同じ理念や目的を持って一緒に活動ができるようになれば素晴らしいと思う。

● 千葉県立桜が丘特別支援学校
教頭 勝田 幸裕

プログラムの全体的印象

- ▶ とても熱心な先生方が多いと感じた。討議も盛り上がり、意見交換も活発に行われた。
- ▶ 本校の中学部生徒の歓迎パフォーマンスでは、かなり感激していただけた様子で、子どもたちの達成感も大きかった。

プログラム成果

- ▶ 子どもたちが覚えたてのタイ語で挨拶したり、臆せず関わりを持とうとする姿勢があつたりしたことは、成果であつた。

苦労した点

- ▶ 東京からの移動時間や交通渋滞を考えると、到着時間が読めないのが、計画段階で遅延した場合も想定して作成した。
- ▶ 特別支援学校は子どもたちの実態から、変更に対応することが難しいことも多いので、事前の準備を入念にしていく必要がある。
- ▶ 当日、他の行事と重なったり、校長が出張中ということもあり、いろいろと行き届かなかったことがあつたと思う。

加えるとよいと思われる活動

- ▶ 教員同士の交流から、ゆくゆくは生徒同士の交流へと広がって欲しい。

プログラムの改善に向けた助言

- タイの先生方は非常に熱心で、本校の教職員にとっても非常に勉強になった。今後、機会があれば、諸外国の特別支援学校の先生方と交流ができると、専門的な内容で交流が深まるように思う。

●渋谷区立原宿外苑中学校

校長 白倉 昌裕

プログラムの全体的印象

- 熱心に話を聞くとともに授業もよく見れていた。日本語ができることもあり、多少授業も理解できたのではないだろうか。直接日本語での質問もあった。また、指導方法や教材に関しての突っ込んだ質問もあった。
- ACCU の姿勢や考え方がしっかりと伝わり学ぼうとする意欲が感じられた。
- 通訳の質が十分担保されていた。
- 事前に ACCU 側で資料作成の協力をいただいたのは良かった。

プログラム成果

- 生徒の多文化理解学習の良い体験の場となった。事前に資料を作成し生徒に配布したり、中学 1 年生を対象にタイの言葉や文化について 1 時間授業を行った。生徒が家庭に帰って保護者にこのことについて話をしていった。
- 本校教職員が国際理解教育に関心を持つきっかけとなった。熱心に受入れに対応しようとする教職員も見られた。
- 本校が考える国際理解教育に関して区教育委員会に見てもらうことができた。
- ネットワークが広がった。

苦勞した点

- 本校の施設・設備面で対応が十分でない面があった。(15 名以上入れる会議室がない、大型バスの駐車スペースがない等)
- 生徒との交流時間が十分とれなかった。もう少し時間的な余裕がほしかった。
- 食事時間の確保が不十分だった。
- お茶等の接待、記念品等の準備が公立学校の校費では難しい。

加えるとよいと思われる活動

- 可能であれば、タイの先生方に文化紹介等の授業等直接生徒との関わりを持つチャンスがあると良かった。
- 協議時間をもう少し確保したい。

プログラムの改善に向けた助言

- 受入れる学校間での、連絡調整および担当者の顔合わせがあっても良いかもしれない。
- 機会があれば今後とも、海外からの訪問を積極的に受入れていきたい。

第III章

日タイ教育交流会議

1. 実施の経緯
2. 評価および今後の展望・課題
3. 日本参加者の声

1. 実施の経緯

ACCU では、これまで 10 年以上にわたり国際連合大学の委託を受け、韓国・中国との国際教育交流事業を企画・実施運営してきたが、今年度からタイとも交流事業を開始することとなった。この「タイ教職員招へいプログラム」では、これまでの国際教育交流事業のなかで行ってきた学校訪問、教育についての講義、文化教育施設訪問といった内容に加え、「日タイ教育交流会議」と題しタイからの参加者 15 名と日本の教職員 15 名がより良い友好関係を築き、互いの国の教育について理解を深めるための交流会議を開催した。

国際教育交流事業では、訪問先の学校で行われる教職員との意見交換会がたいへん好評を得ており、国は違えど同じような問題を抱えているということに気づき、親近感を覚えたという感想、また、ある問題に対して自国とは異なるアプローチをしている海外の教職員との交流により、新しい視点が得られたという感想など、我が国と招へい国のどちらにとっても非常に良い経験となったことが、現場での声や事後のアンケートからうかがえた。

一方で、訪問先の 3~4 校の教職員としか交流ができず、それ以外の学校の教職員との意見交換を行う機会が充分ではないという点を惜しむ声も多くあった。また、学校訪問時には意見交換以外にも授業参観や学校説明、歓迎セレモニーなどさまざまな内容が用意されており、通常、意見交換には 30 分~1 時間ほど時間が充てられるが、もう少し時間を延ばし深い議論がしたいとの声もあった。ACCU としても、初等中等教育に携わっている海外からの教職員を招へいするにあたり、より多くの日本教職員と交流する機会を持てることを望んでいた。

両国間のネットワーク強化という側面か

らも本会議の開催は必要であった。本事業は招へい期間中に国際交流がなされることはもちろん、帰国後も持続可能なネットワークの構築・強化を目的として位置づけている。過去には、本事業をきっかけとして姉妹校締結に至った例や、手紙交換、SKYPE による合同授業など授業交流につながったという例も多くある。交流希望や交流の具体案を持って参加する教職員は多くいるが、訪問校以外の教職員との交流の機会が限られていたため、条件に合った学校を見つけられない参加者が多くいた。また、訪問校に交流の申し出が集中し、それが交流の持続を難しくしたというケースもあった。

こうした経緯、経験を踏まえ、より多くの学校の教職員と深く交流できるよう、本会議が実施されるに至った。

2. 評価および今後の展望・課題

タイ・日本両国からの高いニーズ

平日の開催であったため、募集開始当初は日本側の参加者が集まるか不安の声もあがったが、いざ募集が始まるとわずか 4 日で定員が埋まり、公募締切となった。また、会場校が東京であったにも関わらず北海道や長野県など他の地方からも参加があり、日本教職員がタイ教職員との交流に高い関心を持っていることがうかがえた。訪問校以外でも、今回参加した日本の 15 名のように、両国の交流に興味のある熱心な教職員に窓を開いた点で、交流会議の実施は評価できる。一方で、定員や会場の関係で参加できなかった教職員も多くいたため、定員の拡大、東京以外での実施は今後の課題の 1 つである。

タイ教職員からは「さまざまな学校の先生と交流ができ、非常に良い時間となった」との感想が多くあがり、また、プログラム最終日に提出する評価票に「交流会議での

ディスカッションが最も有意義だった」と記入した教職員もいた。

7日間という滞在時間で訪問できる校数が限られているなか、本会議の実施により、より多くの学校の教職員と交流し、各学校の成果、課題、実践例などを知ることができたのは、タイ教職員にとって意義深かった。

予備知識について

タイ教職員は訪問2日目に文部科学省で日本の教育制度やESDについての講義を受け、さらに学校訪問で日本の教育現場を実際に見たうえで交流会議に望んだ。一方で、日本の教職員はタイの教育についての事前知識を得られる機会がなかった。参加者からも、そのような機会が欲しかったとの要望が少なくなかった。事前に関連資料を配布、もしくは交流会開始前に講義の時間をとることでより大きな成果が得られることが期待できるため、次回以降改善したい。

実施時間の拡大

両国の参加者から出た共通の課題としては時間不足が挙げられる。学校訪問時に行われる意見交換会は30～60分程度だが、本交流会議では2倍以上の時間を確保していたため、企画当初、時間は十分であると考えていた。実際には自己紹介で会話がはずみ、テーマ別ディスカッションもたいへんな盛り上がりを見せ、あっという間に時間が過ぎた。参加者からは、「時間が足りなかった」、「もう少し時間があればより深い議論ができただろう」との声があった。

今後はさらに十分な時間を確保し、より深い議論ができるようにしたい。加えて、成果物作成や成果発表を行うことで両国の参加者がより多くのものを得ることができ、プログラムを提供していきたい。

交流支援体制の確立

事前調査で両国の教職員に、学校間交流や授業交流についての希望調査を行ったところ、「手紙交換」「SKYPE交流」「相互訪問」といった方法でプログラム終了後も持続的に交流することを望む声が多くあがっていた。交流会議終了後、今後の交流について話ができたとの報告もあった。それらが実現するか今後の経過を見守るとともに、ACCUとしては持続的な事後交流がなされるような枠組みづくり、サポート体制の充実に努めていきたい。

(人物交流部 齋藤 盛午)

3. 日本参加者の声

1. 感想

- 教員相互の交流を第一に構成されたプログラムが印象に残った。「日本人といえば」への回答が「ルールを守る」や、「教育の中で心がけていること」が「ルールを守る人を育てる」ことにあった点はとても印象に残った。日本人の中にもルールやマナーが守れない人が多数いることを考えると、複雑な気持ちにもなった。
- 今回の交流会議では、タイの先生方や日本各地の先生方と「教育」をめぐる意見交換ができ、とても良い機会となった。両国では、学校教育制度も生徒の様子も教えている内容も異なる部分があるが、その一方で、共通の課題（例えば、どのように生徒の学習意欲を引き出すか等）も多くあり、その課題をめぐるそれぞれの苦労や工夫、アドバイスを聞くことができ、印象に残っている。
- 実際にタイから来られた先生たちと接

し、ごく表層かも知れないが、国の環境や教育事情の一端を知ることができ、強い関心を持つことができた。日本語を学習している先生が多く、コミュニケーションが非常に円滑だったことも一因かもしれない。

- ▶ タイの先生方と交流する機会は初めてだったので、とても貴重な体験となった。また、全国の先生方とお会いできたのも良かった。教育の課題や大切にしていることなど、教員としての根底の部分に両国の間で共通点が多いということも新しい発見だった。
- ▶ 教授方法や多文化交流などのトピック毎にテーブルに集まり話し合えたことは非常に盛り上がったし、私にとって良い刺激となった。
- ▶ 日本語の上手な方が多く、日本語を話すことができるタイの方がこんなに多くいらっしゃるということと、タイの中学校や高等学校で日本語を学ぶことができるということを今回初めて知り、とても驚いた。
- ▶ このような交流会議をすることは両国の教員にとってとても良い経験になると思うので、今後もぜひ開催してほしいし、機会があればまたぜひ参加したいと思う。
- ▶ タイの先生方が、日本の「礼儀」や「マナー」について口を揃えて言及されているのが印象的だった。例えば、掃除や授業開始・終了時の号令など、私たちが普段当たり前のこととして意識さえしていない事柄も、タイの先生方は非常に驚かされていた。同時に、それらに「礼儀」や「マナー」を養うための教育的な意味を見出すことができた。タイの先生方との交流を通じて、日本の教育を客観的に見ることもできた。
- ▶ ファシリテータ役（司会者）の方の進行に、とても好感が持て、和やかな素晴らしい会になったと思う。

- ▶ 開始時は緊張感で話しづらい雰囲気だったが、テーブルごとに話す場面からはいきなりアイスブレイクできた。やはり意識の高い人が集まっているからか進行が円滑だった。テーブルごとの話し合いがとても充実していたので、もっと時間がほしかった。
- ▶ タイにはマナーについての授業があり、社会担当の先生が歴史、経済、地理、政治のほかに教えているということを知り、興味深かった。
- ▶ 教育者として、子どもたちに伝えたいこと（意識していること）というテーマで話し合ったとき、「自分がどう生きるか」ということももちろんだが、「世の中に役立つ人としてどう生きるか」という視点がタイの先生方には強いと感じた。

2. 交流計画

- ▶ タイの先生方の多くが日本語教員であったので、本校のJSL (Japanese as a Second Language) 生徒との「日本語」を介した交流ができればと考えている。例えば、日本語スピーチコンテストなどを考えている。
- ▶ 現在、個人対個人でメール等のやりとりをしているので、今後は、学校と学校の交流へとつなげていこうと考えている。まずはメールアドレスを交換し、写真や動画による交流（交流する情報は、互いの国の自然環境や産業から始め、教育上の課題へと発展させたい）を進め、最終的には生徒の訪問や短期留学等へと発展することを希望している。
- ▶ 私の勤務する羅臼町は、地形のうえで閉鎖的で、幼稚園・小・中・高等学校の児童生徒たちにとって他の地域、とりわけ海外との交流の機会を持つことは教育上大きな価値を持っている。今

回の交流会議をきっかけに学校間の交流がすぐにでも実現しそうな見通しをもつことができ、早速実現化への取組を始めるつもりでいる。具体的には、メール等での交流を続けながら、来年度には私がタイを訪問し、学校間の橋渡しをすることを考えている。

- 現在、1人の先生とLINEで個人的な交流を行っている。今後、生徒間でもメール等の交流を進めることができればと考えている。
- 来年度以降の交流学习に向け連絡を取ろうと思っている。交流学习には繋がっていないが、帰国されたタイの先生から一緒に撮った写真がメールで送られてきた。今後もつながり、一緒に何かできればいいなと考えている。
- ①メールで教員同士の交流を続ける。
②お互いの学校生活の1コマを写真に収め、その様子をメールで交換、説明する。
- 現時点では、中学校の生徒会活動として生徒同士の交流を考えている。

3. 改善点

- グループワークでは、両国の先生方の実践の様子を垣間見ることはできたが、時間的に限られていたので、十分に詳細まで知ることができなかつたのは残念だった。例えば、それぞれの具体的な実践をポスターなどで紹介する「ポスターセッション」などができると面白いと思った。
- 今回交流できたのは、夕方からの数時間だけだったので、例えば1日使うなど、もう少し時間が取れば交流も深まると思った。
- 首都圏に留まらず地方都市への訪問もあるとより素晴らしいと思う。
- 教育交流会議の内容は、時間の制約もあるので、今回のプログラムでいいと

思う。改善点を挙げるとしたら、時間枠を拡大すること。最初から食事ができる会場を使い、食事もプログラムに組み込んでしまえば、移動時間のロスもなく充実した時間を過ごせるのではないか。

- グループで話し合う時間ももっと増えるといいと思う。懇親会もあったが、最初からそのような雰囲気でも進めてもいいかも知れない、とも思った。
- 言葉を交わして議論するのも悪くはないが、実際に交流活動で行うようなアクティビティ（共通のテーマで絵などの作品を協力して作り上げ、それを鑑賞・発表しあう等）を通して、感性・価値観等を含めた相互理解ができればいいと思った。
- 冒頭の自己紹介の時間が長すぎた。面白かったが、その後の交流の時間が削られてしまったのはもったいない気がした。「1分以内」など制限を設けるべきだった。
- 2回に分けて行った交流のテーマが、適当ではない気がした。1つ目の「教師としてのこだわり」というテーマは、「教師としてどういう姿勢で生徒と接しているか」なのか「教師として生徒に何を教えたいのか」なのかが曖昧で、付箋に書かれた内容もその両方が混じっていた。
- 時間がとても短くあっという間だった。自己紹介も大事だし、意見を交換する時間も大事…。もう少し長く時間をとれるのであれば、あと1時間ぐらい長くてもいいと感じた。
- お互いの学校生活の様子を簡単にプレゼンテーションをした上で、話し合いに臨むことができると、よりお互いの教育をイメージしながら行えるのではないかと思った。小グループを形成し、それぞれの学校の様子を写真や文で紹介し合えると、更に素敵な会議になる

のではないか。日本でもタイでも、地域や公立私立によっても相違点があるので、日タイの教育を幅広く知ることができると思う。

- 交流が続くなら、会議のテーマももう少し絞って次回以降に繋げて欲しい。
- 教育事情（制度・課題・国の事情・政治経済も）を互いに事前に出し合っておくと話し合いたいポイントが明確になり、時間を有効に使える。互いにもっと話したいことがあったと思う。
- タイの先生たちは、2校ほど見学してから交流会議に参加されていたので、見学先の学校で観察したことについて発表し、疑問をぶつけるなど、具体的な事例を挙げて話し合うほうが、より生産的な議論ができるのではないかと思う。
- 学校紹介のパンフレットや資料などをもとに、互いの学校について話ができるといいと思った。（人数が多い交流会では『話す→通訳→話す』といった会話だけで得られる情報量が少ないため）
- 複数のテーマについて細切れに話すのではなく、いくつかテーマを挙げて、フリートークという形で時間を取っても良かったと思う。

付録

1. 実施要項
2. プログラム日程
3. 参加者リスト
4. 関係機関リスト
5. 文部科学省講義資料

◆付録 1. 実施要項

タイ教職員招へいプログラム (2015年11月9日－15日:東京)

実 施 要 項

1. 背 景

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)では、我が国とアジア太平洋地域の教職員間の交流を深め、相互理解と友好の促進に資するため、国際連合大学の委託を受け、2002年より国際教育交流事業を実施してきた。

この国際教育交流事業では、これまでに韓国および中国との交流を行い、2015年8月までに韓国からは延べ1,766名、中国からは1,490名にのぼる教職員を招へいした。また、日本から訪韓した469名、訪中した297名の教職員と合わせ、日韓間、日中間の相互理解促進、学校間交流に大きく貢献してきた。

2015年からは、この国際教育交流事業の一環として、さらに多くの国の教職員との交流を図るため、文部科学省、タイ教育省の協力のもと、2015年11月9日(月)から15日(日)までの7日間にわたりタイ王国から初等中等教育教職員約15名を本邦に招へいする「タイ教職員招へいプログラム」を実施する。

2. 目 的

- (1) 日本の教育制度、学校教育の現状や特色ある取り組みをタイ教員に紹介するとともに、持続可能な開発のための教育(ESD)について地域の好事例を紹介する。
- (2) 学校等での意見交換を通じて、日タイの教育の質を高める。
- (3) 日本の文化および社会全般に対する理解を深める。
- (4) 訪問する学校や施設などでの交流や日タイ教員による教育交流会議を通じて、日タイ教職員の持続的なネットワークの構築、強化に寄与する。
- (5) 日タイ両国の相互理解と友好を促進する。

3. 日 程

日付	日程	訪問先	活動
11月9日(月)	第1日	東京	日本到着 オリエンテーション
11月10日(火)－ 13日(金)	第2－5日	東京	開会式、文部科学省講義、 日タイ教育交流会議 学校訪問(授業見学、教員、児童生徒との交流) ホームステイ
11月14日(土) (15日(日))	第6日 (第7日)	東京	日本出発(深夜)

4. 参加者数

約15名

5. 参加資格

- (1) タイ王国の国民であること。
- (2) 所属する学校等からの推薦を受けた、タイ王国の初等中等教育の教職員であること。(教育行政官及び教育専門家を含む)
- (3) プログラム参加中ならびに参加後も積極的に主に教育分野における日タイ交流および国際相互理解を深める活動に取り組む姿勢を持つもの。
- (4) プログラムの全日程に参加が可能であること。

なお、参加者は、①45歳以下で教員経験3年以上のもの、②日本の教員、児童生徒、学校との交流を希望しているもの、③持続可能な開発のための教育(ESD)の分野において積極的な活動を行っているもの、④英語または日本語の会話能力のあるものが望ましい。

6. 評価と報告

日本出発前(第6日)

各参加者は ACCU の用意する評価票に記入する。

帰国後

各参加者は報告書を作成し、タイ教育省に提出する。

7. 渡航費等

ACCU は下記の経費を負担する。

(1) 往復航空運賃

タイ国内の指定された国際空港と、日本国内の指定された国際空港との間のエコノミークラス航空券。

(2) 宿泊と食事

プログラム期間中の宿泊(朝食含)、およびプログラム期間中の食事。

食事が提供されない場合については食費を支給する。

(3) 日本国内の移動旅費

プログラム期間中の、自由行動時以外の国内移動旅費。

※上記以外の経費については参加者が負担することとする。

8. 海外旅行傷害保険

各参加者は、プログラム期間中に起こりうる傷害、疾病等の緊急時に備えて、各自の責任において、必ず海外旅行傷害保険に加入すること。

9. 通 訳

公式プログラム期間中は原則として日本語とタイ語間の逐次通訳が行われる。

10. 申請・推薦手続き

タイ教育省は、参加者を選定し、9月16日までに参加者リストおよび参加者のデータシート、パスポート控えを揃えて、ACCU へ推薦することとする。

11. このプログラムに関する照会先

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター 人物交流部 担当: 齋藤

〒162-8484 東京都新宿区袋町6番地 日本出版会館

TEL: 03-3269-4498 FAX: 03-3269-4510

E-MAIL: accu-exchange_ml@accu.or.jp

◆付録 2. プログラム日程

日次 / 第 1 日	วันที่ 9 เดือน พฤศจิกายน (วันจันทร์)	11月9日 (月)
07:10	เดินทางออกจากกรุงเทพ (สนามบินสุวรรณภูมิ) (NH806)	バンコク(スワンナプーム空港) 発 (NH806)
15:05	เดินทางถึงโตเกียว (สนามบินนาริตะ)	東京(成田空港) 着
17:45	เดินทางถึงโรงแรม	ホテル着
18:00-19:00	ออเรียนเทชั่น (ไดอิจอินเอเคะบุคไระชั้น2 ฮอลล์ฟลาวเวอร์)	オリエンテーション(第一イン池袋2F「フラワーホール」)
	อาหารเย็น (รับประทานเอง)	夕食(各自)
	การแต่งกาย : ชุดลำลอง	当日の服装: カジュアル
	ที่พัก : ไดอิจอินเอเคะบุคไระ (เขตนะริมะ โตเกียว)	当日の宿泊: 第一イン池袋(東京都豊島区)
日次 / 第 2 日	วันที่ 10 เดือน พฤศจิกายน (วันอังคาร)	11月10日 (火)
8:45	เดินทางออกจากโรงแรม	ホテル発
09:45-11:20	เข้าพบกระทรวงการท่องเที่ยว, บรรยาย บรรยาย I การให้การศึกษาในระดับเบื้องต้นและระดับกลางของญี่ปุ่น บรรยาย II การผลักดันESDของญี่ปุ่น	文部科学省表敬訪問、講義 講義 I 「日本における初等中等教育について」 講義 II 「日本におけるESDの推進について」
11:30	กระทรวงศึกษาธิการ ออกเดินทาง	文部科学省出発
12:15-16:30	เยี่ยมโรงเรียนประถมโอะกุชิมะนะเอะ (อาหารกลางวัน)	荒川区立尾久宮前小学校訪問(給食)
17:15	เดินทางถึงโรงแรม, อาหารเย็น (รับประทานเอง)	ホテル着、夕食(各自)
	การแต่งกาย : ชุดสุภาพ สู้	当日の服装: ビジネス
	ที่พัก : ไดอิจอินเอเคะบุคไระ (เขตนะริมะ โตเกียว)	当日の宿泊: 第一イン池袋(東京都豊島区)
日次 / 第 3 日	วันที่ 11 เดือน พฤศจิกายน (วันพุธ)	11月11日 (水)
10:10	เดินทางออกจากโรงแรม	ホテル発
11:00	เยี่ยมโรงเรียนมัธยมปลายนานาชาติคันโต (อาหารกลางวัน)	関東国際高等学校訪問(学食)
16:00-16:30	พักพรรค	休憩
16:30-18:30	แลกเปลี่ยนความคิดเห็นด้านการศึกษาของไทยและญี่ปุ่น (โรงเรียนมัธยมปลายนานาชาติคันโต)	日タイ教育交流会議(関東国際高等学校)
18:30-20:00	อาหารเย็น (โรงเรียนมัธยมปลายนานาชาติคันโต)	夕食(関東国際高等学校)
20:30	เดินทางถึงโรงแรม	ホテル着
	การแต่งกาย : ชุดสุภาพ สู้	当日の服装: ビジネスカジュアル
	ที่พัก : ไดอิจอินเอเคะบุคไระ (เขตนะริมะ โตเกียว)	当日の宿泊: 第一イン池袋(東京都豊島区)
日次 / 第 4 日	วันที่ 12 เดือน พฤศจิกายน (วันพฤหัสบดี)	11月12日 (木)
8:30	เดินทางออกจากโรงแรม	ホテル発
10:00-13:30	เยี่ยมโรงเรียนสำหรับผู้พิการทางสมรรถภาพทางร่างกายชะงะกะโอะกะ	千葉県立桜が丘特別支援学校訪問(給食)
14:45	เดินทางถึงโรงแรม	ホテル着
	จัดงานอิสระ, อาหารเย็น (รับประทานเอง)	自由研修、夕食(各自)
	การแต่งกาย : ชุดสุภาพ สู้	当日の服装: ビジネスカジュアル
	ที่พัก : ไดอิจอินเอเคะบุคไระ (เขตนะริมะ โตเกียว)	当日の宿泊: 第一イン池袋(東京都豊島区)
日次 / 第 5 日	วันที่ 13 เดือน พฤศจิกายน (วันศุกร์)	11月13日 (金)
10:15	เช็คเอาท์, ส่งกระเป๋าเดินทางไปยังสนามบิน, เดินทางออกจากโรงแรม	チェックアウト、荷物送付、ホテル発
11:00-14:00	เยี่ยมโรงเรียนมัธยมต้นสะระคุเกียเวน (อาหารกลางวัน)	渋谷区立原宿外苑中学校訪問(給食)
14:15-15:30	เยี่ยมชมศาลเจ้าเมจิ	明治神宮視察
16:00	พิธีพบปะโฮมสเตย์ (โรงเรียนมัธยมปลายนานาชาติคันโต)	ホームステイ対面式(関東国際高等学校)
	โฮมสเตย์	ホームステイ
	การแต่งกาย : ชุดสุภาพ สู้	当日の服装: ビジネスカジュアル
	ที่พัก : โฮมสเตย์	当日の宿泊: ホームステイ
日次 / 第 6 日	วันที่ 14 เดือน พฤศจิกายน (วันเสาร์)	11月14日 (土)
	ใช้ชีวิตร่วมกับโฮมแฟมิลี่	ホストファミリーと過ごす
15:00	รวมตัวที่โรงแรมเคโอพลาซ่า (สิ้นสุดโฮมสเตย์)	京王プラザホテル集合(ホームステイ終了)
	จัดงานอิสระ, อาหารเย็น (รับประทานเอง)	自由研修、夕食(各自)
20:00	รวมตัวที่โรงแรมเคโอพลาซ่า	京王プラザホテル集合
20:35	เดินทางโดยลิฟต์ชินมีส (โรงแรมเคโอพลาซ่า⇒ สนามบินชานะตะ)	リムジンバス出発(京王プラザホテル⇒羽田空港)
21:20	เดินทางถึงสนามบินชานะตะ, เช็คอิน	羽田空港到着、チェックイン
	การแต่งกาย : ชุดลำลอง	当日の服装: カジュアル
	ที่พัก : บนเครื่องบิน	当日の宿泊: 機内泊
日次 / 第 7 日	วันที่ 15 เดือน พฤศจิกายน (วันอาทิตย์)	11月15日 (日)
0:30	โตเกียว (เดินทางออกจากชานะตะ) (NH849)	東京(羽田発) (NH849)
5:45	เดินทางถึงกรุงเทพ (สนามบินสุวรรณภูมิ)	バンコク(スワンナプーム) 着

◆付録 3. 参加者リスト

タイ訪問団・参加者リスト

★訪問団团长：スプラニー・カムユアン氏

No	姓	名	性別	学校名	担当教科	都市/県
1	ジッタメッタグン Jittamettagun	スニサー Sunisa	女	Debsirin School	英語/日本語	バンコク
2	ジッティジャリーグン Jittijarekul	パッティラ Pattira	女	Chomsurang Upatham School	日本語	アユタヤ
3	サンサタン Sangsatan	サシトーン Sasitorn	女	Kaengkhoi School	英語/日本語	サラブリー
4	モレク Molek	ティダラク Tidarak	女	Srinagarindra The Princess Mother School Kanchanaburi	日本語	カンチャナブリ
5	パンコン Pankhong	サシトーン Sasitorn	女	Triam Udom Suksa School of the South	日本語	ナコンシタマラート
6	スワンタウィ Suwantawee	チュリーポー Chuleeporn	女	Worarachaloem Songkhla School	日本語	ソングラー
7	アシボン Asipong	プラパツォン Prapatsom	女	Prangku School	英語/日本語	シーサケート
8	パイアノン Phaianont	スチャダー Suchada	女	Boonwattana Schoo	日本語	ナコーンラーチャシーマー
9	アムボン Amhong	ポーンラバット Pornlapat	女	Pua School	英語/日本語	ナーン
10	ルアーンアロン Lueang-Aroon	ピチャイ Phichai	男	Sri Ayudhya School	情報/日本語	バンコク
11	ホンワサン Phonwasan	ポームマリン Poommarin	男	Saint Francis Xavier Convent School	英語/フランス語	バンコク
12	ホンワッサランヤー Hongwanusruya	チャンタナ Chantana	女	Saint Joseph Bangna School	英語	サムットプラーカーン
13	サント Sangthong	パッタラシリー Pattarasiree	女	Pramochwittaya Ranintra School	社会	バンコク
14	スアン・ウドム Suan-Udom	ジュタマード Juthamard	女	Wat Srabua Primary School	タイダンス	バンコク
★15	カムユアン Khamyuang	スプラニー Supranee	女	Office of the Permanent Secretary, Ministry of Education		バンコク

メイン通訳:野田 ユウリー
通訳補助:小石 シリワン / 野村 節子

日タイ教育交流会議・日本人参加者リスト

No	姓名	性別	学校名	担当教科	都市/県
1	森 裕紀子	女	千葉県立桜が丘特別支援学校	全教科、保健体育	千葉県
2	伊藤 英夫	男	荒川区立尾久宮前小学校	校長	東京都
3	金丸 巧	男	関東国際高等学校	日本語	東京都
4	北山 夏季	女	関東国際高等学校	ベトナム語	東京都
5	井川 一実	男	東京都立西高等学校	社会科(地理)	東京都
6	榎府 暢子	女	東京大学教育学部附属 中等教育学校	家庭科	東京都
7	小出 一也	男	長野県飯山高等学校	英語	長野県
8	横田 雅江	女	多摩市立愛和小学校	総合・家庭科	東京都
9	名久井 千秋	女	狛江市立狛江第六小学校	全教科	東京都
10	金澤 裕司	男	北海道羅臼町教育委員会	理科(生物)	北海道
11	百田 明弘	男	町田市立小山田小学校	全教科	東京都
12	生田目 将	男	狛江市立狛江第二中学校	副校長	東京都
13	馬場 晴美	女	市川中学校・市川高等学校	世界史	千葉県
14	都筑 靖	男	市川中学校・市川高等学校	国語	千葉県
15	針谷 健太	男	自由学園	英語	東京都



大臣政務官の堂故氏（前列中央）を囲んで（文部科学省）



訪問団団長のカムユアン氏（文部科学省）



日タイ教育交流会議にて（関東国際高等学校）

◆付録 4. 関係機関リスト

United Nations University (UNU) / 国際連合大学
5-53-70 Jingumae Shibuya-ku, Tokyo 150-8925
〒150-8925 東京都渋谷区神宮前 5-53-70
TEL: 03-5467-1212 FAX: 03-3499-2828 URL: <http://unu.edu/>

Mr. TAKEMOTO Kazuhiko
Director, UNU-Institute for the Advanced Study of Sustainability (UNU-IAS)
竹本 和彦
国際連合大学 サステイナビリティ高等研究所 所長

Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) / 文部科学省
3-2-2 Kasumigaseki, Chiyoda-ku, Tokyo 100-8959
〒100-8959 東京都千代田区霞ヶ関 3 丁目 2 番 2 号
TEL: 03-5253-4111 URL: <http://www.mext.go.jp>

Mr. TOYOOKA Hiroki
Director, International Affairs Division, Minister's Secretariat
豊岡 宏規
文部科学省 大臣官房国際課 課長

Lecturer : Mr. YAMAMOTO Tsuyoshi
Elementary and Secondary Education Planning and Coordination Unit
Lecturer : Mr. NODA Akihiko
Assistant Director-General for International Affairs

講義 : 山本 剛
初等中等教育局初等中等教育企画課 専門官 (併) 教育公務員係長
講義 : 野田 昭彦
国際統括官付 国際統括官補佐

Royal Thai Embassy / タイ王国大使館
3-14-6 Kami - Osaki, Shinaawaku, Tokyo 141-0021
〒141-0021 東京都品川区上大崎 3-14-6
TEL: 03-5424-0652 FAX: 03-5424-0658
URL: <http://www.thaiembassy.jp/rte1/>

Ms. PORNPIT Somwong
Minister Counsellor (Education)
ポーンピット・ソムウォン
タイ王国大使館学生部 公使参事官

School Visit Hosts

学校訪問でご協力いただいた方々

Ogumiyamae Elementary School / 荒川区立尾久宮前小学校

1-4-17 Nishiogu, Arakawa-ku, Tokyo, 116-0011

〒116-0011 東京都荒川区西尾久 1-4-17

TEL: 03-3893-3536 <http://www.aen.arakawa.tokyo.jp/OGUMIYAMAE-E/>

Mr. ITO Hideo

Principal

伊藤 英夫

校長

Ms. GUNJI Mieko

Vice Principal

郡司 美恵子

副校長

Kanto International Senior High School / 関東国際高等学校

3-2-2 Honmachi, Shibuya-ku, Tokyo, 151-0071

〒151-0071 東京都渋谷区本町 3-2-2

TEL: 03-3376-2244 <http://www.kantokokusai.ac.jp/english/>

Mr. FUJIKURA Hidenori

Principal

藤倉 秀測

校長

Mr. KUROSAWA Shinji

Vice Principal

黒澤 眞爾

副校長

Sakuragaoka School for Special Needs Education / 千葉県立桜が丘特別支援学校

1538 Kasoricho, Wakaba-ku, Chiba-city, Chiba 264-0017

〒264-0017 千葉県千葉市若葉区加曾利町 1538

TEL: 043-231-1449 <http://www.chiba-c.ed.jp/chibapref-sakuragaoka-sh/>

Mr. HAYASHI Kikumori

Principal

林 菊盛

校長

Mr. KATSUTA Yukihiro

Vice Principal

勝田 幸裕

教頭

Harajukugaien Junior High School / 渋谷区立原宿外苑中学校

1-24-6 Jingumae, Shibuya-ku, Tokyo, 150-0001

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 1-24-6

TEL: 03-3402-7526 <http://academic1.plala.or.jp/haragai/>

Mr. SHIRAKURA Masahiro

Principal

白倉 昌裕

校長

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU) / 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

Japan Publishers Building, 6 Fukuromachi, Shinjuku-ku, Tokyo 162-8484

〒162-8484 東京都新宿区袋町6 日本出版会館

TEL: 03-3269-4498 FAX: 03-3269-4510

Email: accu-exchange_ml@accu.or.jp URL: <http://www.accu.or.jp>

Mr. TAMURA Tetsuo
Director-General

田村 哲夫
理事長

Mr. KISO Isao
Executive Director

木曾 功
業務執行理事

Mr. NINOMIYA Masakazu
Deputy Secretary-General
Director, General Affairs Department

二ノ宮 正和
事務局長代理 総務部長

Ms. SHINDO Yumi
Director, International Exchange Department

進藤 由美
人物交流部 部長

Ms. ARIZONO Yoshiko
Programme Specialist, International Exchange Department

有菌 佳子
人物交流部 事務専門員

Mr. SAITO Seigo
Programme Specialist, International Exchange Department

齋藤 盛午
人物交流部 事務専門員

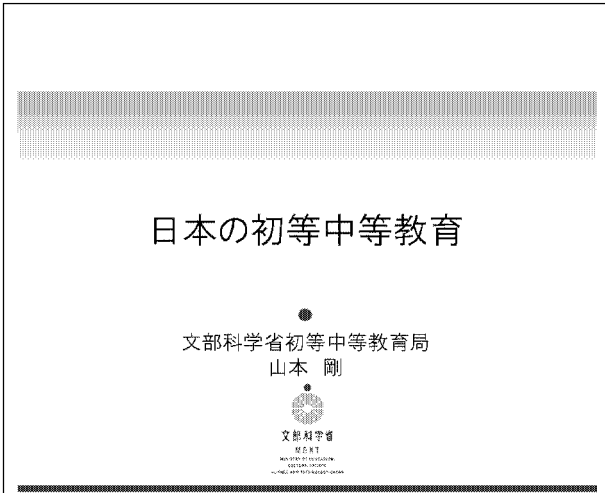
Ms. FUJIMOTO Saeko
Programme Specialist, International Exchange Department

藤本 早恵子
人物交流部 事務専門員

Ms. KAWAGUCHI Eriko
Project Staff, International Exchange Department

河口 枝里子
人物交流部 プロジェクトスタッフ

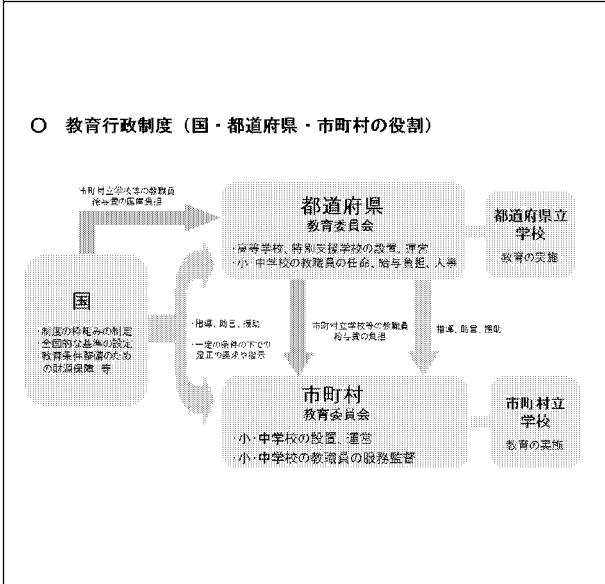
◆付録 5. 文部科学省講義資料



○ 学校数、在籍者数、教員数

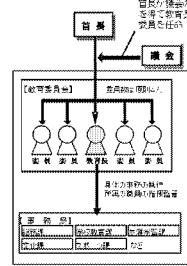
		幼稚園	小学校	中学校	高等学校	中等教育 学校	特別支援 学校
学校数	計	12,905	26,852	10,557	4,963	51	1,096
	(校)						
	国立	48	72	73	15	4	45
公立	4,714	20,558	9,707	3,628	30	1,037	
私立	8,142	222	777	1,320	17	14	
児童生徒数	計	1,557,461	6,600,006	3,504,334	3,334,019	31,499	135,617
	(人)						
	国立	5,614	41,067	31,220	8,613	3,160	3,033
公立	264,563	6,491,396	3,227,314	2,286,385	20,424	131,781	
私立	1,287,284	77,542	245,800	1,039,021	7,915	603	
教員数	計	111,059	416,475	253,832	235,306	2,432	79,280
	(人)						
	国立	344	1,833	1,628	575	214	1,502
公立	23,366	409,753	237,082	174,563	1,620	77,479	
私立	87,355	4,889	15,122	60,368	698	289	

出所：文部科学省「平成26年学校基本調査結果」等



○ 教育委員会制度

1. 教育委員会制度の仕組み



○ 教育委員会は、市長から任命した行政委員として全ての教育行政及び市町村単位に設置

- 教育委員会は、教育長が主宰する会議で、教育行政における重要事項の基本方針を決定し、それに基づいて教育長が具体的な事務を執行。
- 教育長及び教育委員は、官制が、議会の同意を得て、任命。
- 教育長は、専断で、教育委員会を代表、任期は4年で、再任可。
- 教育委員は、非専断で、原則4人、任期は4年で、再任可。

2. 教育委員会制度の意義

- 政治的中立性の確保
 教育は、その機能が中立公正である、とが極めて重要。個人利権の濫用、現や特定の利益誘導力から中立性を確保する、ことが必要。
- 政治的安定性の確保
 教育は、子供の健全な成長発展のために、要する期間を通じて一貫した方針の、一貫的に行われることが必要。
- 地域住民の参加の確保
 教育は、地域に開いた、関心の高い行政分野であり、専門家のみが行うのではなく、広く地域住民の参加を促し入ることが必要。

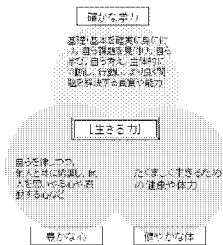
○ 学習指導要領

全国のどの地域で教育を受けても、一定の水準の教育を受けられるようにするため、教科科目を定め、学校教育法等に基づいて、各学校で教育課程(カリキュラム)を編成する際の基準として「学習指導要領」を定めている。

「学習指導要領」では、小学校、中学校、高等学校等において、それぞれの教科等の目標や大きな教育内容を定めている。

また、これとは別に「学校教育法施行規則」で、別表の小・中学校の教科等の年間授業時数等を定めている。

各学校では、この「学習指導要領」や年間授業時数等を従って、地域や学校の実態に応じて、教育課程(カリキュラム)を編成している。



○ 教員養成・免許制度

【免許状主義】

教員は、教職職員免許状により授与される免許状の所持が条件となり、任用される。

【教員養成・採用・研修等の各段階を通じた教員の資質向上】

養成

- 志望者の募集方法の確保
- 教職課程の認定を受けた学科等において、教科に関する科目、教職に関する科目などを修得することにより、採用当初から学級や教科を担う、教科指導、生徒指導等を実施するための必要な基礎的資質能力を養成

採用

- 地域特性・担い手確保に資する採用方法の確保
- 採用当初から学級や教科を担う、教科指導、生徒指導等を実施するための必要な基礎的資質能力を養成
- 採用当初から学級や教科を担う、教科指導、生徒指導等を実施するための必要な基礎的資質能力を養成

研修

- 初任の研修(新任教員等)に対する研修
- 研修(新任教員等)に対する研修
- 研修(新任教員等)に対する研修
- 研修(新任教員等)に対する研修

適任な人事管理

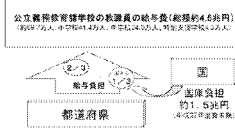
- 指導が不適切な教員に対する人事管理システムの適切な運用
- 教員評価システム
- 優秀教員表彰

免許更新制

- 教員が定期的に最新の知識技能を身につけることで教員が自覚と責任を持って教職に専ら、社会の信頼と期待を受ける、ことが目的
- 教員が、その職に有効期間

○ 義務教育費国庫負担制度

- 憲法の要請に基づき、義務教育の根幹（機会均等、水準確保、無償制）を国が責任をもって支える制度。
- 市町村が小中学校を設置・運営。
- 都道府県が教職員を任命し、給与を負担。
- 国は教職員給与の1/3を負担。

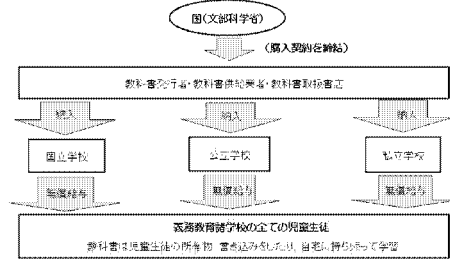


○ 教員の給与

- 教員に優れた人材を確保し、もって義務教育水準の維持向上を図ることを目的として、教員の給与を一般の公務員より優遇することを法律で定めている。
(学校教育水準の維持向上のための義務教育諸学校の教職員の人材確保に関する特別措置法)

○ 教科書無償給与制度

- ・我が国においては、教科書の役割の重要性から、その使用義務が法律で定められている。
- ・憲法第26条の義務教育費の精神をより広く実現するものとして、授業料の不徴収と、筆記材料費が無料とされる。
- ・無償給与の対象は国、公・私立の義務教育諸学校の全児童生徒、その使用する全教科の教科書。
- ・平成27年度政府予算には、義務教育教科書購入費等として約42億円が計上。



持続可能な開発のための教育(ESD)について

～今日よりいいアースへの学び～

文部科学省国際統括官付



I 持続可能な開発のための教育(ESD)について

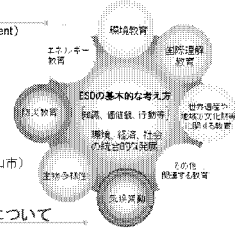
1. 「ESD(持続可能な開発のための教育)」とは?

ESD=Education for Sustainable Developmentの略。
持続可能な社会の担い手を育むため、地球規模の課題を自分のこととして捉え、その解決に向けて自分で考え行動を起こす力を身に付けるための教育です。

2. 「国連ESDの10年」(UNDES)について

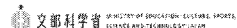
(United Nations Decade of Education for Sustainable Development)

- ・2007年 ユネスコ世界会議で我が国が提案
- ・2002年 国連決議(第55回総会)
 - ・2005～2014年の10年
- ・ユネスコを主幹機関に指定
- ・2006年 UNDES国際実施計画をユネスコにて策定
- ・2008年 ESD世界会議(ボン)
 - ・ボン宣言の採択
- ・2014年 持続可能な開発のための教育(ESD)に関するユネスコ世界会議(愛知県・名古屋市/岡山市)
 - ・あいち・なごや宣言の採択
 - ・ユネスコ/日本ESD賞の創設



3. グローバル・アクション・プログラム(GAP)について

- ・2013年 第37回ユネスコ総会にて採択
- ・2014年 第69回国連総会にて採択
- ・2015年～2019年 グローバル・アクション・プログラム(GAP)に基づいたESDの推進



I 持続可能な開発のための教育(ESD)について

10年間の総括

DESDの取組から明らかになったESDの推進のために重要なこと
(出典:ユネスコDESD最終レポート)

持続可能な開発を実現するためのESD

1. 持続可能性の問題に対処した教育制度
2. 持続可能な開発アジェンダと教育アジェンダの統合

ステークホルダーのESDへの関与の重要性

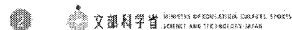
3. 政治的リーダーシップ
4. マルチステークホルダーのパートナーシップ
5. 地域のコミットメント

教授法の革新を喚起するESD

6. ESDの実践への機関包括型アプローチ
7. 学習者主導の双方向の教授法

教育の全てのレベル及び分野に広がるESD

8. 公教育へのESDの導入
9. ノンフォーマル及びインフォーマルなESDの拡大
10. 持続可能な開発を前進させる技術・職業技術教育及び研修



I 持続可能な開発のための教育(ESD)について

10年間の総括 - ESDに関する文部科学省の取組

日本ユネスコ国内委員会

- ・2003年 「国連持続可能な開発のための教育の10年」に関してユネスコが策定する国際実施計画への提言

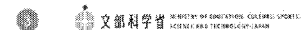
- ・2007年 「持続可能な開発のための教育の10年」の更なる推進に向けたユネスコへの提言

・同年第34回ユネスコ総会でESD推進のための決議へ

- ・2008年 持続発展教育(ESD)の普及促進のためのユネスコスクール活用について(提言)

- ・2012年 ユネスコスクールガイドラインについて

- ・2014年 多様化の時代におけるユネスコ活動の活性化についての提言 ～持続可能な社会の構築を目指して～



II ESDに関するユネスコ世界会議の成果

参加国・参加者

- ・愛知・名古屋(2014年11月10日(月)～12日(水))
163か国・地域 から、閣僚級/6名を含む1,000名以上が参加
- ・岡山(2014年11月4日(火)～8日(土))
Student(高校生)フォーラム、教員フォーラム、ユネスコワールド全国大会、ユネスココンパニオンのステークホルダー委員会に 約2,000名が参加

世界会議における成果

- ・採択された各種宣言
 - ①「あいち・なごや宣言」
 - ②「ESD推進のためのユネスコスクール宣言」
 - ③「ユネスコ・ステートメント」
 - ④「ユネスコスクール世界大会Student(高校生)フォーラム共同宣言」
 - ⑤2014年以降のRCEとESDに関する岡山宣言
- ・「国連ESDの10年」の後継プログラムである「グローバル・アクション・プログラム」(GAP)開始の正式発表
- ・「ユネスコ/日本ESD賞」創設の正式発表



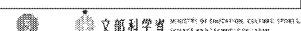
II ESDに関するユネスコ世界会議の成果

グローバル・アクション・プログラム(GAP)の総括

- ・「国連ESDの10年」の後継プログラムとして位置付ける
- ・下記5点を優先分野として2015年以降のESDの取組を推進する
- ・各ステークホルダーからのコミットメントが収集される

5つの優先行動分野

政策的支援	実施と適切にリンクした政策環境を整える
機関包括型アプローチ	教授内容や方法論の再方向付けだけではなく、持続可能な開発に則したキャンパスや施設管理においても求められるアプローチ
教育者	ESDの学習のファシリテーターとなるよう、教育者、トレーナー、その他、変化を押し進める人の能力を強化する
ユース	ESDを通じて、変革を進める人としての役割を担うユースを支援
ローカルコミュニティ	効率的・イノベティブな解決策の源泉である地域レベルにおける行動促進のためのESDの最大限の活用



Ⅱ ESDに関する「ユネスコ」世界会議の経緯
「ユネスコ／日本ESD賞」創設の正式発表

1. ユネスコ／日本ESD賞の国際公募について

ユネスコ／日本ESD賞は、世界中のESDの実践者にとってより良い取組に挑戦する動機付けと、優れた取組を世界中に広めることを目的として、日本政府の財政支援により創設され、ESDに関するユネスコ世界会議 閣僚級委員会及び全体のとりまとめ委員会(2014年11月、愛知県名古屋市内)にて、下村文部科学大臣から正式に発表されました。2015年には第1回表彰式がユネスコ本部(フランス・パリ)にて開催されました。

この賞は、ユネスコ加盟国又はユネスコと正式な協力関係にあるNGOが、それぞれ3件まで個人・団体をユネスコに推薦できます。世界中から推薦された案件から、国際審議会による選定に基づき、毎年3件の受賞団体・者をユネスコが決定します。受賞団体・者に授与される賞金は5万USD/1件です。

2. 国内公募について

文部科学省は、国際公募に併せて、ESDを実践する団体、学校又は個人を公募し、応募書類に基づいてユネスコに推薦する件を選挙します。

【平成27年推薦団体・者】

- ▶岡山ESDプロジェクト(岡山ESD推進協議会)
- ▶ESDランダーを活用したホール・スクールアプローチによる日本と世界の学校教育の改革(江東区立八名川小学校)
- ▶目の前の課題に真摯に向き合うコミュニエータのリーダーを生み出す「マイプロジェクト」(認定特定非営利活動法人カサリバ)

3. 受賞団体・者の決定及び表彰

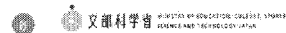
【平成27年受賞団体・者】

- ▶Asociación SERES (プアアラ共和国 エルサルバドル共和国)
- ▶The Centre for Development of Early Childhood, Non-Formal and Informal Education (インドネシア共和国)
- ▶Promo Ability (ドイツ連邦共和国)

平成27年11月：ユネスコ総会時に表彰式開催

参考：ユネスコ／日本ESD賞ウェブサイト

<http://www.mext.go.jp/unesco/000/1356180.htm>



Ⅲ ESDの異なる推進に向けた取組
ESD推進拠点としてのユネスコスクール

ユネスコスクールはESDの推進拠点です。

文部科学省及び日本ユネスコ国内委員会では、ユネスコスクールをESDの推進拠点と位置付け、その加盟校数の増加に取り組んでいます。

また、その質を確保するため、ユネスコスクールガイドラインを策定しました。

ユネスコスクールとは？

ユネスコ憲章に示されたユネスコの理想を実現するため、平和や国際的な道徳を支援する学校であり、ユネスコが認定する学校です。

現在、世界182以上の国・地域で13,300校以上のユネスコスクールがあります。

日本国内の加盟校数は939校です(平成27年5月現在)。

①ユネスコ憲章(抜粋)

第1条 目的及び任務

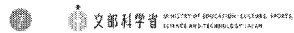
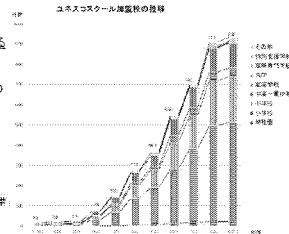
上記の目標の目的は、世界連合会が世界の諸人種に対して人類

性、商業及び宗教の差別なく確立している平等、法の支配、人権

及び文化を自由に対する普遍的な尊重を醸成するにあり、平等、平等

及び文化を通じて諸民族間の協力を促進することによって、平和

及び安全に貢献することである。



Ⅳ ESDの異なる推進に向けた取組
ESD推進拠点としてのユネスコスクール

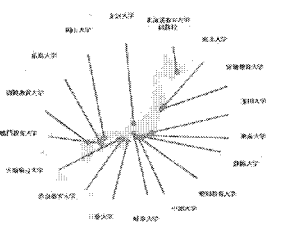
ASPUnivNet ユネスコスクール支援大学間ネットワーク

大学高等教育機関は、ESDに関する優れた教育資源を提供できる能力を備えています。その能力を生かし、ユネスコスクールのパートナーとしてユネスコスクールの活動を支援するための大学間ネットワークがユネスコスクール支援大学間ネットワーク(ASPUnivNet)です。

活動内容

日本の特色ある取組として、ユネスコスクールに助言・支援をしています。

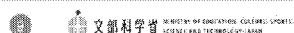
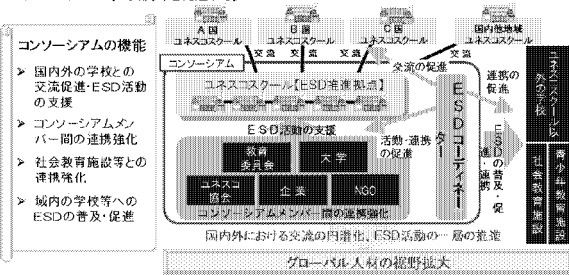
- ①学校のユネスコスクール加盟(申請や活動)を支援します。
- ②大学の持つ知的資源をユネスコスクールの活動に提供します。
- ③国内外のユネスコスクールとのネットワーク作りを支援します。
- ④地域の教育機関とユネスコスクールとの連携を促進します。



Ⅳ ESDの異なる推進に向けた取組
ESD推進拠点としてのユネスコスクール

ESD推進のためのコンソーシアムの形成

教育委員会及び大学が中心となり、ユネスコ協会及び企業等の協力を得つつ、ESDの推進拠点であるユネスコスクールとコンソーシアムを形成し、ESDの実践・普及及び国内・国外におけるユネスコスクール間の交流等を促進する。



ESDの取り組み事例

ユネスコスクール優良事例
(東京都多摩市立多摩第一小学校)

ユネスコスクールでの取組事例
多摩市立多摩第一小学校

【活動概要】

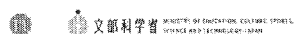
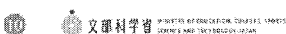
- ・校内や周辺の自然環境を生かした取組
(自然との調和、生命尊重や循環、多様性等)
- ・ホールスクール・アプローチ
- ・環境教育で活動を開始→国際理解教育や情報教育に発展

【指導方法】

- ・問題解決の力が高まるよう、課題発見・予想と計画・調査・まとめ・発信を毎年繰り返す

【指導内容】

- ・発達段階に応じて視野を広げる
身近な自然体験→地域→国内→世界



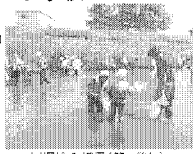
ユネスコスクールでの取組事例

多摩市立多摩第一小学校

第1～2学年(生活科)

身近な自然環境への関心、地域学習への関心を高める

- ・自然体験遊び、ネイチャーゲーム
- ・多摩川探検



川探検の様子(第2学年)

第3学年(総合的な学習の時間)

地域の自然、焦点、公共施設、農業の見学調査→発表

- ・インタビューによる調査
- ・デジカメを使った記録方法
- ・ポスターセッション発表
- ・地域伝統芸能体験



農家の方から話を聞く(第3学年)



文部科学省 MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY, JAPAN

ユネスコスクールでの取組事例

多摩市立多摩第一小学校

第4学年(総合的な学習の時間)

多摩川のテーマ別グループ学習

- ・調査結果の予想、調査方法の話し合い→計画書作成→実地調査→活動の改善点検証
- ・テレビ会議活用



河原の石の調査(第4学年)

第5学年(総合的な学習の時間)

校内での稲作体験学習

- ・地域の農家による指導
- ・収穫した米:6か国の留学生から世界の米料理を教えてもらい、食を通じた国際理解
- ・米の消費を増やすプロモーションビデオ作成→インターネット投稿・発信



校内の稲刈り体験(第5学年)



文部科学省 MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY, JAPAN

ユネスコスクールでの取組事例

多摩市立多摩第一小学校

第6学年(理科→総合的な学習の時間)

エネルギー学習

- ・様々な発電方法の調査・発表
- ・風力発電機作成
- ・発電の大きさや大規模な施策が必要なことへの理解
- ・自然エネルギーを身近に感じ、日本や世界のエネルギー問題の未来を考える



羽根を工夫した風力発電(第6学年)



文部科学省 MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY, JAPAN

●国際連合大学 2015-2016 年国際教育交流事業●
タイ教職員招へいプログラム
実施報告書

2016 年 3 月

編集・発行

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

〒162-8484

東京都新宿区袋町 6 番地 日本出版会館

電話 (03) 3269-4498

Email accu-exchange_ml@accu.or.jp

URL <http://www.accu.or.jp>

Printed in Japan by WACO Inc. [100]

©2016 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)

